
イノセント・アライブ ~命の選択と荒ぶる息吹~

沙 亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イノセント・アライブ ～命の選択と荒ぶる息吹～

【Zコード】

Z0153Y

【作者名】

沙 亜竜

【あらすじ】

『そのまま進む』
『一歩、立ち止まる』

提示された選択肢に、息吹は首をかしげる。
とりあえず立ち止まってみた。するとすぐ目の前に、大きな毛虫が落ちてきたではないか！

息吹には、選択肢が見える。

母親からあらわることを選択するようしつけられ、いつしか選択肢が見えるようになっていた。

その母親は亡くなってしまったが、今の息吹は母親の友人だった小白百合のもとで生活している。

息吹は親友のゆりかとともに、小百合が学園長を務める、お嬢様学校と名高い藤星女学園に通っている。

そんなある日、息吹は近所の男子校に通う優季にひと目惚れする。ゆりかごに後押しされ知り合いにはなったふたりは、徐々に仲を深めていくのだが。

「息吹ちゅん、どうしてするの？」

お母さんがわたしをじっと見つめながら、両手に持ったお皿の上のケーキを交互に目の前へと掲げ、そう質問してくれる。

いつもそうだった。

べつに怒つたり急かしたりするわけではない。

ただひたすら、わたしに選択をせるのだ。

「うんとねえ～……、え～っとねえ～……」

お母さんの右手のお皿には、生クリームの白とイチゴの赤が絶妙なコントラストを奏でる、ケーキのお姫様、ショートケーキが乗せられていた。

そして左手のお皿には、白いドレスに身を包みしつとつとした雰囲気を漂わせる、ケーキのお嬢様、レアチーズケーキが乗せられている。

わたしは小さい頃からケーキには目がないのだけど、その中でもショートケーキとレアチーズケーキは大大大好物だった。

「はう～、どちらも、たべたいよ～……」

流れ出る涙ダレを拭うことすら忘れ、わたしのキラキラした瞳はふたつのお皿の上を行ったり来たり。

田だけじゃなく頭も左右に大きく振り動かし、ツインテールの髪を振り乱しながら、ふたつのケーキの姿を変わりばんこに視界いっぱいに映していた。

「うふふ、ダメよ、息吹ちゃん。りょんと決めないと

笑顔のままではあつたけど、言ひことを聞かないと怖い、って思
いは幼心にもあって。

「えつと、その、いつちー」

わたしなお母さんが右手に持つショートケーキを指差す。

「はー、どうぞ」

答えを聞いたお母さんは満足そうに微笑み、右手のお皿をわたし
の皿の前に置いてくれた。
むづりとつのお皿は、お母さんの皿の前に。

「わーい、いただきまーす」

フォークを持ち、皿の前のショートケーキに、わたしは手を伸ば
す。

ぴたつ。

そこで、手は止まつた。

視線の先には、チーズケーキを口に運ぶお母さんの姿。

フォークからお母さんの口の中へと滑り込んでいくレアチーズケ
ーキの欠片を、わたしはただ黙つて眺めていた。

「…………」

「あら？ 息吹ちゃん、どうしたの？」

「…………ん、と……」

やつぱり、レアチーズケーキのほうがよかつたかな。
わたしは口に出して言つことができなかつた。

「うん、なんでもない」

小さく答えたわたしは、ショートケーキをフォークで小さめに切る。そして、そのひと切れを覚束ない手つきでフォークに乗せ、自分の小さな口へと運んだ。
甘くて美味しい。

でも……。

レアチーズケーキのほうが食べたかったかも、といつ思いでいっぱいになつていたわたしの口に広がる甘さには、なんとなくほろ苦さも混じつているように感じられてならなかつた。

「息吹ちゃん、美味しい？」

「…………うん」

お母さんの問いかけに答えるわたしには、愛想よく笑顔を浮かべる余裕なんて、残つてゐるはずもなかつた。

「おはよひ」やこます、息吹さん
「あっ、おはよひ、ゆりかさん」

わたしが住宅街の真っただ中にある曲がり角まで差しかかると、いつものように制服姿の女の子から声がかけられた。

彼女は華美月ゆりかさん。
お嬢様学校と呼ばれる藤星文学園に通う彼女は、毎日この曲がり角の隅に立つて、わたしを待つてくれている。
もちろんこのわたし、神奈息吹も、れつきとした藤星文学園の生徒だ。

藤星文学園では、下の名前にさんづけで呼ぶのが通例となつていいので、わたしたちもお互いにそう呼び合つていい。
どんなに仲よしの相手でも、呼び捨てにしたりはせず、名前にさんづけで呼ぶ。それが学園のルール。
べつに規則になつていいわけではないけど、学園の雰囲気もあつてか、そのルールは堅実に守られているようだ。

「それでは、参りましょつか」「ええ」

ゆりかさんは優しげな笑みをたたえながら、ゆつたりとした動作でくるりと百八十度回転して歩き始めた。

制服のスカートがふわりと微かに舞うことすら、優雅さを演出してくれているかのよう。

ウェーブがかった彼女の長い髪も風に揺れ、全身でひとつの中

作品みたいに思える。

「」の制服を着てお嬢様とさやかれるくらい有名な学校だから、わたしなんかだと登校時にも周囲の目が気になってしまふのだけど。

そんな視線を受けてもまつたく気にする様子もなく、ゆつたりと歩くゆりかごさん。

彼女は完璧に、お嬢様だった。

それに比べてわたしは 。

「……どうかなさいました？」

「……いえ、なにも……」

ゆりかごさんがそつと見つめてくれる中、わたしはただつむいで答えるだけ。

今でこそ少しはマシになつてきているものの、わたしは昔から気が弱くて、人と話すのが大の苦手だった。

声が小さいのも、自分に自信がないことから来ているように思つ。それに決断力も弱いため、なにをするにしてもなかなか決められなくて、優柔不断と言われてしまつ場合も多い。

ゆりかごさんは、そんなわたしに愛想を取かすことなく、中等部の頃から一緒にいてくれている大切な友人だ。親友と言つてもいい関係だつ。

彼女と出会つたのは、中等部に上がつた初日。新しい学校の新しい教室に入る決意がなかなかできず、ドアを前にしておどおどしているときだった。

彼女はこきなつわたしの手をぎゅうと握って、一緒に教室へと入ってくれた。

あのときの手の温もつま、今でも忘れられない。

それから丸三年とちよつと。

わたしはその頃とあまり変わっていないけど。

ゆりか『せんぱい』でも、わたしのすぐそばで微笑んでくれていた。

「そうですか。 それでは今日も一日、頑張りましょうね」

「……うん

優しく包み込んでくれる彼女の横に並んで歩きながら、わたしは控えめに頷く。

わたしはただ『せんぱい』で歩くだけの状態だったのだけど、

「藤星文学園の生徒さんたまよ」

「やつぱり優雅ね~」

『せんぱい』をしに来たからおばせんふたりが、ひそひそと話すやな声が聞こえてきた。

……わたしは、全然優雅なんかじゃないのに……。

沈んでいるわたしのそばにいるとき、ゆりか『せんぱい』だったて、余計なことなんか言わずに寄り添つてくれていた。

そんなわたしだけど、実はちょっと変わった能力を持つていたりする。

「桜……もうすっかり散つてしましましたわね～」

「うん、そうね」

校内をゆっくじと散策するわたしとゆりかっこさ。といつても、お昼休みや放課後ではない。

今は一時間目と一時間目の合間にある休み時間。

藤星文学園では、移動教室の場合でもゆつたりと慌てず騒がず歩いていけるよう、休み時間が長くなっている。

その分、午後の授業が終わる時間は遅くなってしまうのだけど。

ともかく、そんなゆつたりとした時間経過の中で、藤星の学園生活は成り立っていた。

現に今だつて、とくに移動教室というわけでもないのに、ゆりかこさんとふたりでお散歩しているわけだし。

学園の敷地はかなりの広さがあつて、毎時間歩いていても飽きることはない。

……つていうのはさすがに大きさかもしれないけど。

藤星文学園は、初等部から高等部までがひとつつの敷地内にあり、さらには藤星女子大もすぐ隣に並んで存在している。

女子大の敷地自体は一応、高等部までとは分かれていて、両校のあいだには高い壁が立ちはだかっているのだけど。

実際には何ヶ所かある通用門からお互いに行き来することが可能で、警備の人にチェックされたりするわけでもないから、ほとんど

同じ敷地内と言つてしまつていいくらいだつた。

わたしもゆりかさんも、たまに大学の食堂まで行つてお皿い飯を食べたりするし。

もつとも藤星女学園も女子大のほうも、不審者が敷地内に入らなによつて、正門と裏門は厳重に警備されてゐる。

だからこそわたしたちは、こんなにもゆつたりとした学園生活を送ることができるのだろう。

と、不意に。

微かな風が、ツインテールにまとめているわたしの髪の毛を揺らす。

そしてそれと同時に、わたしの頭の中に浮かび上がつてゐるものがあった。

『そのまま進む』

『一旦、立ち止まる』

浮かび上がつてゐる「もの」、ここに「文字」と書つたほうがいいのかもしれない。

正確にはなんとなく、そんなふうに感じじるだけではあるのだけだ。

「息吹さん？」

すぐ右横に並んで歩いていたゆりかさんも、わたしの表情がいきなり硬くなつたのを感じたのか、首をかしげながらのぞき込んでくる。

わたしは優柔不斷な自分の脳みそにムチ打つて、瞬時に判断を下す。

今の今まで、じつやつてこの桜並木の下を歩いてきていたのだから、「そのまま進む」なんて、わざわざ改まって決断するようなことでもないはず。

ということは。

×『そのまま進む』

『一旦、立ち止まる』

わたしあはペタつと、その場に立ち止まつた。

「あら? どうなさいました?」

もちろん、一緒に歩いていたゆりかごさんも、首をかしげたまま立ち止まる。

次の瞬間。

ぱとり。

上のほうから 正確にはおそらく、桜の木の枝か葉っぱから、とっても大きくてなんだか鮮やかな色合いをした物体が、わたしたちふたりのすぐ手前の地面に落つこちてきた。なんとそれは、大きな毛虫だった。

そのあとは、ちょっと大変だった。

毛虫に驚いたわたしたちが泣き喚き叫び騒いだから、……ではない。いや、実際のところ、わたしはそれくらいの勢いだったのだけど。

「あら、毛虫ですかね。可愛いですわ」

とかなんとか言ったと思ったら、ゆりかごさんはそっとしゃがみ込んで、事もあらうに細くて白い可憐な指先を、極彩色のまがまがしい毛虫くと伸ばし始めた。

「や、ひみつと、ゆりかごね、ダメだよー。」

慌ててわたしは手を伸ばし、ついねうねうひめく毛虫まで数センチくらいにまで迫っていたゆりかごさんの手をぎゅっとつかむ。だって、いくら本人が可愛いって言っていても、毛虫なんだよ？ 種類によるかもしれないけど、毛虫の毛って毒があるのもいるみたいだし……。

それに、毛のよう見えて、ちょっと硬くてトゲのようになつていてる種類もあるらしいから、もし毒がなかつたとしても、指に刺さつてケガをしちゃうかもしれない。

とっても綺麗で透き通るよう真っ白なゆりかごさんの指に、血の赤なんて似合わないよ。

それにゆりかごさんつてば、普段から頻繁にスキンシップしていくっていうか、わたしの手を握ったり首筋とかを触つてきたり、そんなことも多いわけだし。

毛虫なんかをつかんだ手で触られたりしたら、いくら親友とも言つべきゆりかさんであつても、ちょっと嫌だ。

……この理由のほうが強かつたのかもしないけど。

ともかくわたしは、ゆりかさん的手をぎゅっと握つて、彼女の瞳を見つめていた。

「あらあら、息吹さん。今田はとっても積極的ですね
「いや、えつと、頬を赤らめて、そんなこと言わないで……」

わたしのほうも反射的に真っ赤になりながら、ゆりかさん的手を離す。

「ふふふ、冗談ですわよ」

ほんとだらうか。

わたしは友達関係四年目になる今でもまだ、ゆりかさんって人がよくわからないままだつたりする。

ただ、彼女の行動のおかげで、毛虫に驚いたわたしが泣き喫き叫び騒いだりするようなこともなかつたのだから、ここには感謝しておぐべきなのだらうとは思つけど。

といひで、わつきの「あれ」は、わたしが持つ能力。

頭の中に「そのまま進む」「一旦、立ち止まる」という文字が浮かんだ、あれだ。

なんだか知らないけど、不意に選択肢が「見える」といふ文字が浮しひはある。

こつ、どういう場合に見えるのが、自分でもわからない。

この能力がテストの問題とかにでも有効だったら、まあ、なんて素晴らしい能力なんでしょう、と感動ものだつたりするのだけど。そういう場合に選択肢が視えたことは、残念ながら一度もない。

お嬢様学校と呼ばれる藤星女学園や隣の藤星女子大は、それなりに学力レベルも高い学校ではある。

ただ、基本的にエスカレーター式だから、本人が望みさえすれば進学できないなんてことはほとんどない。

もちろん面接を受ける必要はあるし、藤星女子大への進学の場合にはテストを受ける必要もある。大学は一般入試も実施していて、敷地も別だからだろうか。

それでも一般入試とは分けられているため推薦枠扱いとなり、落ちることは稀らしい。

そんな環境だからか、この学園の生徒たちはみんな、通常、とてものんびりとした雰囲気の中で過ごしている。

もつとも、中間テストや期末テストがある以上、順位づけされるのは仕方がないようで、総合順位は掲示板に貼り出されてしまうのだけど。最低限の競争意欲は持たせようということだろうか。

そしてわたしの成績はどの程度なのかといえば、お恥ずかしながら、下から数えてほとんどすぐ、というくらい。

ありていに言って、おバカさんなのである。

トップクラスの成績を誇るゆりかごさんに教えてもらつたりしながら頑張つて勉強しているのに、どうしてなのかなあ。

はあ……。せっかくの能力も、上手に活かせなきゃ無意味だよね

……。

と、そのとき。

また微かな風が吹き抜けていった。

『急ぐ』

『諦める』

……え？ なに？

またしても選択肢が視えたといつて、わたしはまったく意味がわからなかつた。

次の瞬間。

予鈴のチャイムが高らかに響き渡つた。

藤星文学園では、休み時間が長めに設けられているからか、授業開始二分になると予鈴が鳴ることになつていてるのだけど。

「あ、ちよっとここからでは、教室まで遠いですわね」

やつ、いつもなら戻る時間を考えながらお散歩しているのに、今日は毛虫の一件があつたせいで、ついつい教室から遠い場所に立ち止まつてしまつていたのだ。

とすると、おのずと答えは決まつてくる。

『急ぐ』

『諦める』

「急ぎまじゅう、やつか！」
「ええ、せんりんですわ」

わたしの提案に、ゆりかごさんも頷く。

とはいえ、慌ただしく走つたりなんかしない。

お嬢様学校である藤星の敷地内で、スカートを振り乱しながら走ることはタブーとされているからだ。

もちろん、遅刻したら先生に怒られてしまつわけだけど。
でも、廊下を走つて怒られることがほつが、この学園ではよつぽ
ど恥ずかしい事態なのだ。

「息吹さん、ちょっとよろしくかしら~。」

次の休み時間になつた途端、クラスメイトの静香さんがわたしに話しかけてきた。

いつもどおりお散歩に出かけようつと、わたしの席にゆつたりと歩み寄つてきていたゆりかさんよつとも、ちらりと見く。

「はい、なんでしょう~。」

「占ひをしていただきたいのでしょうか~。」

わたしの質問に答えたのは、静香さんではなくゆりかさんだつた。

どうじつわけだか、少々不満顔なのが気にかかるといふだけ。

「はい、せうなんですの。お願ひできますかしら~。」

微かに首をかしげながら控えめにお願いしてくる彼女に、わたしは否と答えることなんてできはしなかつた。

「……ええ、こ~ですよ」

ちよつとだけゆりかさんの顔色をつかがいつつ、わたしは静香さんの申し出を受け入れた。

わたしには選択肢が見えるという能力がある。

だけどわたしは、他の人にそのことを話したりはしていない。

ゆりかさんにだけは話してあるけど、彼女もそれを言いふらし

たりなんて絶対にしない。

もちろん、いつでも好きなときに選択肢が視えてくれるわけではないし、それ以前に選択肢が見えるのって、わたし自身に関わるような決断を迫られるときばかりのように思つ。

だから仮に能力のことを話していたとしても、それで占いや予言ができるわけじゃない。

とはいって、勘が鋭いだけなのかそれともやっぱり能力が影響しているのか、わたしの占いは当たると評判だつた。

普段の他愛ない会話の中で、ふと「息吹さんはどう思います?」なんて尋ねられた場合に、わたしの言つたとおりにしたら上手くいつた、ということが何度もあつたからだ。

実際のところ、尋ねられたわたしのほうも、ただなんとなく思つたことを素直に答えただけだし、百発百中つてわけでもないから、能力とは全然関係ないとは思う。

ただの偶然。

それでも、なにかにすがりたい、といつも気持ちもわからなくなつた、とい。

だからわたしは、占いをお願いされたら快く引き受けようにしていた。

占いを聞いた人も絶対ではないというのはわかってくれているから、もし言われたとおりに行動して失敗しても、文句を言つてきたりなんかはない。

しいて文句を言つとすれば、わたしとのお散歩時間を減らされたゆりかごさんくらいだろうか……。

でもそんな彼女だつて、わたしが占いを通じてクラスメイトとお話をしている姿を黙つて見つめながら、ほのかな笑みを浮かべている

のだから、咎める気なんてないはずだ。

「それじゃあ、伺います。なにを占えぱーいのでしょうか？」

「はい。今週末、伯母様のお屋敷でパーティが開かれるのですけれど、着ていくドレスが決まらなくて困っています。どちらがいいか、占っていただきたいのですが」

「ふむふむ」

わたしは静香さんが取り出した一枚の写真を眺める。

真っ赤な薔薇をイメージさせる明るい色合のドレスと、淡い紫色で落ち着いた印象を伝える大人っぽいドレス。

どちらも高価そうだ。

だけどこれって、わたしに聞くような内容でもない気がする。お嬢様学校と呼ばれる藤星女学園に通っているとはいえ、わたし自身は全然お嬢様じゃないのだから。

こんなドレスなんて、もちろんお皿にかかったことすらない。

「へ、うーん……」

さすがに頭を悩ませているわたしに、ゆりか「せんからひと皿

「そんなに凝視しても、息吹さんには品質のよだとか色合のヤンスだとかなんて、わかるはずないでしょう。こつものよつて、ビビッときたほつを選べばいいのですわ」

なんだかちょっと失礼かも、と思わなくもなかつたけど、それは今さら気にすることでもない。ゆりかさんからの扱いつて、普段からこんな感じだし。

でも、彼女の意見はもつともだ。

そう考えたわたしは一度目をつぶり、軽く深呼吸をしてから、新たな気持ちで一枚の写真を見直してみる。

……あつ、なんか、いつちのまつが好きかも。

なんと適当な理由だらうか。自分でもそう思つた。

その直感を信じて、わたしは紫色のドレスの写真を指差した。

「えつと、いつちが、いいかな……」

「わうですね、わたくしもわう思つておつましたの一。」

わたしの答えを聞いた静香さんは、両手を組み合わせながら、ぱーっと明るい笑顔を振りまく。

……わざわざ訊かなくていいの……。

と文句のひとつも言つてやりたい気分ではあつたけど、他の人の意見も聞いておきたいつていうのは、誰しもが考えることだらう。全然占いなんて呼べないとは思つもの、わたしの占いは、意外と的確なアドバイスをしてもらえたと評判らしいし。

意外と、つていうのが、ちよつと引つかかるところではあるなーとか。

わたしなんかの意見で物事を決めちゃつて、本当にいいのかなーとか。

思つところは多々あるけど、わたしの言葉を聞いて喜んでくれて、いる顔を見ると、いつちまで嬉しくなつてくれる。

「息吹さん、ありがとうございました。またにかあつたら、お願ひしますわね！」

「ええ。パーティ、楽しんできたださいね」

笑顔を残して去つていいく静香さんの姿を見送るわたし。
そのすぐ横には、ゆりか「」さん。

「ふふふ、息吹さん、相変わらず頼られておりますわね。毎週何人かは、必ず占いをお願いしてきますものね」

「あ……えつと、『めんなさい』、ゆりか「」さん。お散歩に行けなくなつてしまつて……」

なんとなく責められているよつに感じたわたしは、素直に謝罪の言葉を述べる。

「いえいえ、気になさらないでいいですわ。息吹さん、占いをしているとき、とてもいい顔をなさりますもの。見ているだけで、わたくしも幸せな気持ちを分けてもらいますのよ」

「ゆりか「」さん……」

温かな彼女の言葉に、わたしの心の中も温まつていいくを感じた
……のだけど。

「それに、占いをしてくる息吹さんは集中しておつりますから、わたくしも楽しませていただきましたわ」

「……え？」

「ふふふ、やっぱり気づいておりませんでしたのね？ 占いをしているあいだ、カラカラの髪の毛を撫でさせてもらつたり、ふにふにの「」の腕を触りさせてもらつたりしておつましたのよ？」

「ふえ？」

「それ」「」……、制服の中【】と手を入れて、お胸のままで

……」

突然のわたしの大声で、教室にいる人たちが一斉に視線を向けてくる。

「あの、えつと、『あんなれこ、なんでもあつません。みんな、お隣にならんな』でくだれこ。」

慌てて言い訳をするわたしに、ゆりか『せんせー』を並んで『
口口口とした笑い声を響かせる。

「ふふふ。冗談に決まっているじゃないですか。田の前には、静香さんがいたんですよ？ そこまでしたら、静香さんだつてなにごともなく占いを聞いているはずがないでしょう？ だいたいこのわたくしが、そんなことをするとお思いですの？」

悪びれた様子もなく言い放つやつが『』やんこ、わたしは、

……してもおかしくないと思つてゐるから、あんな大声出しちやつたんだよ。

なんど、やがて口を封して脇へとせでれなかつた。

「今日は暖かいですわね～」

「そうだね～」

わたしとゆりか「さん」は、ゆったりと学園の敷地内を歩いていた。お散歩ではなく、お昼ご飯を食べに行くところだ。軽く汗ばむくらいの陽気の中、爽やかなそよ風がわたしたちを優しく包み込んでくれる。

「今日は、どこへ行きましょうか？」

「う～ん、そうね～……」

と、そこでいつもの選択肢が、頭の中に浮かんできた。

『レストラン』

『カフェ』

『大学の敷地内へ』

『学園の外へ』

藤星女学園の敷地内にはレストランとカフェがあるし、大学のほうにも同じようにレストランとカフェがある。

さらには学校の周辺にもオシャレなお店なんかが多く存在しているから、毎度毎度、迷ってしまうのだ。

なお、お弁当を持つてくる人も多いけど、わたしもゆりか「さん」も、普段からお弁当持参ではなかった。

ゆりかごさんの家はお金持ちだから、毎日ちょっと高めのレストランで食べても大丈夫なくらいの昼食代を用意してもらっているらしい。

一方のわたしは、彼女の家ほど余裕があるわけではないというか、立場上あまり迷惑をかけるわけにもいかず、贅沢はできない身分。お弁当を作つてもらうのも大変だから、お小遣いをやりくりして昼食代に充てているのが現状だ。

もちろん昼食代はもらつているのだけど、最低限必要な金額つてのをしつかりと把握しているため、あまり多くはもらえない。

ただ、ゆりかごさんも一緒に食べるわけだから、わたしにつき合わせて毎日一番安いカフェで食べるのも悪いだろ？
だからこそ、お小遣いからも昼食代を捻出することになるのだけ

ど。

とはいっても、べつにダイエットしているわけではないものの、わたしもゆりかごさんも基本的に少食。

軽い食事で済ませても全然問題なかった。

というわけで、

- × 『レストラン』
- × 『カフェ』
- × 『大学の敷地内へ』
- × 『学園の外へ』

「今日はまた、カフェにしない？」
「ええ、いいですよよ」

わたしの決断に、ゆりかごさんも素直に頷いてくれた。

選択肢が見えるというのは、わたしにとって、ものすごく助かる能力ではある。

昔から優柔不断で、決断したあとでもうじうじと悩んでしまいがちな性格だから。

でも選択肢が見えたときって、どうしてもその選択肢に縛られてしまい、他の解決策を考える余裕がなくなってしまうといった弊害もあるのだけど。

わたしたちはカフェへと入り、サンドイッチセットを注文した。

サンドイッチと飲み物とデザートのセット。

量は少なめだけど、サンドイッチの中身を豊富な種類から好きなように選べるため、人気のメニューだつたりする。

タマゴは外せないとして、ツナやハムといった定番もあれば、サラダ系の軽いものやカツやコロッケなどのボリューム満天なものもある。フルーツ入りホイップクリームなんかも人気で、わたしもお気に入りだった。

中身としてタマゴ、ポテトサラダ、フルーツホイップをわたしが選ぶと、ゆりかごさんも同じものを選び、席に着く。

向かい合わせの席に座ったわたしたちが、お喋りしながらの軽い昼食に舌鼓を打っていた、そのとき。

不意にカフェの外が騒がしくなった。

「あら？ どうしたのでしょうか？」

窓から外に目を移すと、女子生徒たちが一定の方向を指差して、普段はあまり出さないような大きな声を上げていた。

「レストランが火事ですわっ！」

「まあ、大変。怖いですわねえ！」

「まいち緊迫感が足りないお嬢様たちの声に、わたしたちも視線をさらに移動させると、確かにレストランの方向からだらうか、もくもくと煙が立ち昇つているのが見えた。

どうやら火はすでに消し止められたあとで、とくに被害も出ではないみたいだけど。

わたしは、ほっと胸を撫で下ろす。

……レストランに行つてなくて、よかつた。

そんなわたしの感想とは裏腹に、ゆりかごさんときたら、

「あら、レストランのほうに行つておけばよかつたですわね～」

なんて野次馬根性丸出しでぼやいていた。

それだけじゃなくて、

「ふう……。息吹さんの決断つて、やっぱり微妙ですわよね」

なんて、ため息をつきながら、わたしに非難がましい視線まで向けてくる。

ちょっと、ひどいよね？

せつきまではゆつが「せんだつて、このサンデイチセツトはやつぱり格別ですか、とか言って満足そうにしていたのに。

だけどわたしは、

「あははは……。『めんね、『期待に添えられなくて……』

と、沈みがちなつらやきを返すことしかできなかつた。

「それでは、戻りましょつか

「ええ……」

サンデイチセツトを食べ終えて、ゆづくつとくつろごだと、わたしたちはカフュを出た。

そして教室へと戻る帰り道でのこと。

『右』
『左』

突然の選択肢。

……なによ、これ？ どうこういとへ

よくわからず、呆然としてしまつわたしの頭の中では、せりなるイメージが重なる。

5、4、3……

数字が見え、それと同時に、カツチ、コツチと、時を刻むような音が……。

え？ これって……、もしかしてカウンントダウン！？
と……とりあえず、決めなきや！
わたしは深く考えず、即座に決断した。

×『右』
『左』

素早くわたしは右側に飛び退く。

すぐ右横を歩いていたゆりかごさんと、思いつきつ抱きつぶやうな形になってしまったけど……。

と、その後、わたしが歩いていた場所のすぐ左側辺りになにかが落ちてきて、地面に白いシミを作る。

それは、鳥のフンだった。

あ……危なかつた！
安堵の息をつくわたし。……だつたのだけど。

「あらあら、息吹さん。大胆ですわね」

ぱつ、と頬を赤らめながらそんなことを言つてくるゆりかごさん

の瞳は、わたしのすぐ目の前にあって。

「あー、わわわ、『めんなわー』でも、やつこのじやないから

……」

慌てて離れるわたし、

「ふふふ、やつこのひー、ざつこのひですかしじらへ

なんて、ゆりか』わんは意地悪な笑みを向けてくるのだった。

下校時刻、辺りはすっかり黄昏色に包まれていた。

授業の開始時間が少し遅めで、休み時間も長めに取つてある藤星文学園は、帰る頃にはもうすっかり夕方だ。

日が長い夏の時期ならそうでもないけど、冬だと薄暗くなつているくらい。

だからなのか、部活動なんかは自由参加となつていて、どの部活にも所属していない人は結構多い。

わたしもゆりかさんも、そんな中のひとりだった。

だいたい部活をしてから帰ると、辺りは真っ暗になつてしまつわけだし。

学園の敷地内にある寮で生活している生徒以外には、なかなか難しことこうだらう。なにせみんな、お嬢様ばかりなのだから。もつとも、お迎えが来てくれるような家の人はなら、問題ないのかも知れないけど。

「それにしても、夕方ともなると少々涼しくなつてきますわね」

「うん、そうだね~」

ゆりかさんの言葉を肯定しながらも、わたしはその涼しさをほとんど感じることなく歩いていた。

すぐ横で、ゆりかさんが寄り添つて歩いていたからだ。

彼女はわたしの右手をぎゅっと握りながら、ボリュームのある髪の毛もとも、頭をわたしの肩に乗せている。

それにしても、こんなにぴったりと寄り添つて歩くなんて。

ゆりか『せんつて、こつもこんな感じなんだよね。

必要以上にべたべたくついてきたり、手を握つてきたり……。

なんとこ'うか……。

そつちの趣味があるんじやないかつて思つへり。こ

というか、周りの人たちから見たら、わたしもそつち趣味の子
だつて思われちやうんじや……。

だつて思われちやうんじや……。

そう考へてはいるのだけど、ゆりか『せんは親友だし、わたしは
抱合することなんてできなこでいた。

……べつに嫌つてわけでもないしね。温かいし、いい香りがする
し……。

つて、なにを考へてるのよ、わたしはー

おかしな考へこ坐つてしまい、それを焦つて振り払おうとするわ
たしは、きつと顔を真つ赤にしていたことだろひ。

夕陽の赤さが、隠してくれるといいな……。

「あら、どうかなさいました?」

「ううん、なんでもない……」

すぐ右の耳もとから聞こえるゆりか『せんの声こ、わたしは余計
に頬が赤くなつてこくのを感じ、左側に顔をむけたつむきなが
ら小さく答えることしかできなかつた。

……恥ずかしいし、早く帰りたいな。

とは思つものの、ゆりか『せんはこつもべんつ、やつたりゅつく
り歩く。

わたしとふたりの時間を噛みしめるよひこ……。

実際、わたしの住む家は学園からそれほど遠くない。待ち合わせ場所にしている曲がり角まで、あと少し。むすび視界に入るところまで来ていた。

そこからゆりかごさんは、毎日ひとつで歩いて帰っていく。

曲がり角からゆりかごさんの家までは、結構な距離がある。だからわたしは、一緒に彼女の家まで行つてもいいと提案してみたことがあるのだけ。

「そのあと息吹さんがひとりで帰ることを考えたら、わたくし、不安で仕方がなくなつてしましますわ」

ゆりかごさんはひつひつと、せつぱりと断つた。

「それに、短いから」など、ふたりきりの濃密な時間が味わえるというのも、あると思いますわよ？」

さらにつけ加えられた言葉に、わたしましょと首をひねつたものだけだ。

じつこう発言を聞いていると、ゆりかごさんはつてやつぱり、そつちの趣味がありそう、つて思えてしまう。

ただ、彼女はわたしをからかつて面白がつてころぶような様子もあるから、確信を得るには至つていない。

だけど、どつちだつて関係ないのかもしれない。

ゆりかごさんが大切な親友だというのは、疑いようのない事実なのだ。

と、唐突に 。

『「このまま帰る』
『やがて立ち止まつてゐる』

いつもの選択肢。
ん~……つと……?

思わずわたしは、足を止めていた。
足を止めたところとせ、つまづ立ち止まつたところとで。

「あ~…」

「と思つたときにはもう遅く。

×
『「このまま帰る』
『やがて立ち止まつてゐる』

選択肢は、すでに選ばれてしまつていた。

「どうなさこましたの?..」

寄り添つていたゆりか「わんも当然ながら一緒に立ち止まり、わたしの顔をのぞき込む。

「わん、なんでもない」

やう答へながらも、わたしの足は止まつたままだつた。

それからすぐのことだった。ざわざわとした幾人かの声が、夕陽に染められた一角にこだまし始めたのは。

高校生と思われる男子生徒の集団が、曲がり角の向こうから現れたのだ。

どうやらそれは、近くにある春雨高校といつ男子校の生徒たちのようだった。

藤星女学園の指定通学路は、狭い道がほとんどなく、学校から近い道にはPTAの人々が立ってくれていたりする。もちろん、登下校時の安全を守るためだ。

そのせいか、春雨高校の生徒は、あえてこの道を外して登下校する人も多いらしい。

もともと藤星女学園が授業の開始時間と終了時間をずらしているのも、安全性を高めるためだと言われているから、藤星の生徒以外と出くわすことすら稀なのだけど。

そうは言つても、当然ながら藤星女学園専用の道路つてわけではないし、他の学校の生徒や近所の方々が通る場合だってある。

だからべつに、それは驚くべきことではなかつた。

ただ、どうしても身構えてしまう。

小さい頃からずっと女子校生活だったわたしやゆりかさんことつて、男性というのは、未知の生物みたいなものだから……。

それに、今日はなにかの行事でもあったのか、一度にたくさんの男子生徒たちが、この道を通りていった。

こんなにたくさんの男性がいる道を、平然と通ることなんてでき

ないよ……。

きつとせりきの選択肢は、このことを警告してくれたのだ。

あのとせ立ち止まつていなかつたら、ちょいと曲がり角に差しかつたところで、大勢の男性の集団に紛れ込んでしまうといふだつたから……。

でも、そのわたしの考えは間違つていたといふのを、このあとすぐによることとなる。

「ふふふ、やっぱり息吹さん、殿方は苦手ですね」

なんだか嬉しそうに、ゆりかさんつぶやく。

「……ほつといてよ。だいたい、ゆりかごせんだつて、ずっと女子校なんだから同じでしょ？」

「ふふふ、そうでしたわね」

それでは、そろそろ行きましょうか。

わたしの言葉をさらりとかわすと、奴りかこさんはすでに男子生徒たちが通り抜けた道へと、ゆつたりとしたいつもの動作で歩き始

もちろん、わたしの右手をぎゅっと握りながら。

卷之三

「サム」

シバヤニ

わたしの体中に、あたかも電気が流れたかのような衝撃が走った。
反射的に再び立ち止まるわたし。

「あら？ 息吹さん、どうしましたの？」

- 1 -

わたしは、ひと言も答えることができなかつた。

でも、視線は如実に答えを語つてしまつていて。

わたしがじつと見つめるその視線の先をたどるゆづか「むせ、
にまつと、笑つた。

「あらあらまあまあ、息吹さん、そつなんですね~

「あ……あの、えつと……」

じつ答えていいものやら、さつぱつ言葉にドキドキ、どもつまくつ
てこむわたしに、彼女はズバッと解答を示す。

「あの殿方に、ひと目惚れしてしまいましたのね?」

耳もとに唇を寄せて、心底楽しそうな好奇の瞳を向けながら、ゆ
りかごさんはささやいた。

そう、わたしの視線の先には、ゆづくと歩く、ひとりの男子生
徒がいたのだ。

さつき通りかかった男子生徒たちの集団と同じブレザーの制服に
身を包んでいるから、同じように春雨高校の生徒だろう。

ちょっとうつむき加減でゆづくと歩くその人は、むづきの集団
とは違つて、ひとりで歩いているようだつた。

ただなんとなく、その横顔が、わたしの心にビビンと刺激を与
えて……。

だけど……。

「いや、あの、その、ち、違つの……! そそそそ、そんなんじや、
なくつて……!」

「そんなんじやなくて、なんなんですか?」

「えつと、だから、ほら……! えつと……」

「ほらほら、なんなんですか～？ 亂つてみなさいな
いや、だからね……」

も『も』と口を動かすものの、言いたいことを上手く言葉にでき
ないわたし。

「だから、なんですか？ もうこいではないですか。隠さなくてよ
ろしいですわよ？ 認めてしまいなさいな」

「いや、その、違うの、ただ……」

「ただ……？」

わたしはそつと、わざの人の横顔を思い出す。
その横顔はまるで……。

「そつ、ただちゅうとだけ、お父さん似てたから……。だから……」

真っ赤になりながら、必死の抵抗を試みる。
でも、案の定といふか、ゆりかごさんはより面白がつてこんなこ
とを言ひ出す始末。

「あらあら、息吹さんつたら、お父さまラブでしたのね～」
「あのねえ……、もう一つのじやないから……」
「ですが……」

つい今しがたまでちゅうとこやらじこに笑みを浮かべていた彼女の
顔が、ふつ……と、陰る。

「それも、仕方がありませんわよね……」
「…………」

ゆりかじさんのがづらやさしく、わたしは言葉を出すことができなくなってしまった。

べつに、気にしているわけじゃなかった……はずなのに……。

わたしたちふたりが立ち止まつたまま、こんなやり取りをしてい
るあいだに、ぐだんの男子生徒はとっくに歩き去つてしまつたよ
うだ。もうどこにも、その姿を見つけることはできない。

しばらぐのあいだ、わたしたちは徐々に薄暗くなつていく夕焼け
色の中、ただ黙つて立ち尽くしていた。

「……明日は少し早めに、この待ち合せ場所へ来るようにしてみ
ましょうか」

ゆりかじさんはわたしの顔色をうかがいつつ、ゆつたりとした口
調で喋り始めた。

黙つたまま、わたしは頷く。

「……があの殿方の通学路みたいですから、待ち合せしながら通
りかかるのを待つていれば、きっとまた出合えますわ

「……うん……」

ゆりかじさんの気遣いを受け、わたしもできる限りの笑顔を返す
と、ついつきあの人を見かけた曲がり角で手を振り合って、お互
いの家へと向かって歩き始めた。

「ママ、だ〜こすき〜！」

「うふふ、ありがとう息吹けやん〜。」

「これは、こつ頃のことだつただりつか。

よくは覚えていないけど、お母さんて素直な言葉を呟くわたし。
この日は家族三人水入らず。お父さんもわたしたちと一緒に一家
団らんのひとときを楽しんでいた。

「む〜、パパのことは嫌いなのか？」

「うん、パパも、だ〜いすき〜！」

ちょっとこじか氣味に不満をつぶやくお父さんも、素直な思い
を伝える。

「まつまつま！ 息吹〜！ パパも大好きだぞ〜！」

「きやははは！ パパ、おヒゲがくすぐつた〜！」

お父さんはわたしを抱き上げて、ヒゲの生えた頬をすりつぶす
せん。

幸せな、家庭の記憶。

いつまでも壊れることなく、永遠に続くと信じて疑わなかつた日
々。

だけど、平穏な日常とこつものま、とっても簡単に崩れ去つてしまつもの。

このときのわたしはもうひと、そんなことが想像できるはずも
なかつた。

「ただいま帰りました」

「お帰りなさいませ、お嬢様」

わたしが玄関のドアを開けるとすぐ、お母さんの弥生さんが出迎えてくれた。

高級住宅街に建つ、この家。

庭も建物も広いことと、両親ともに忙しいことから、お母さんは雇つて家事全般をお願いしている。

「お荷物、お持ちしましようか?」

「いえ、いいですよ。弥生さん、疲れてるでしょ? 自分で運びます」

「お仕事ですから、『遠慮なさらないで』も『この』」

わたしが彼女の申し出を断ると、やつまつと笑う。

弥生さんは四十代くらいの女性で、ちょっとふくよかなといふが、なんだか安らぎを感じてくれる。

三人目のお母さんと呼んでもいいと思つているくらいの人。

「いつもお疲れ様です。それでは」

「お食事の準備も、じきに終わりますので、できましたらお呼びします」

「はい、お願ひします」

わたしは弥生さんに軽く会釈を残し、階段を上つて自分の部屋へと向かった。

高級住宅街に建てられ、お手伝いさんまでいるこの家。

この家……なんて微妙な表現をしていることから察してもうりえるかもしないけど、わたしは正確にはこの家の子じゃない。

実際には、養子ということになつていいわけだから、今はわたしの家と言つてしまつていいのかもしないけど。

だけど、どうでもすべてを受け入れる気にはなれなかつた。

小学校一年生だった当時、わたしは両親を一度に亡くしてしまつた。交通事故だった。

その後、残されたひとりっ子のわたしを引き取ってくれたのが、本当のお母さんと学生時代からの親友だったといつ、藤星小百合さんだ。

小百合さんの家にはもともとよく遊びに来ていて、両親が事故に遭つたときも、わたしは旅行に出かける両親の邪魔にならないよう、この家に預けられていた。

わたしは小百合さんの住むこの家に養子として迎えられることがなつた。

すべてを受け入れる気にはなれなかつた、とは言つたけど。

小百合さんはわたしを本当の娘のように可愛がつてくれていて、そのことをわたしは心から感謝している。

でも、どうしても本当の両親の記憶がちぢつてしまつのだ。

といふで、藤星という名字からも想像がつくかもしないけど、小百合さんの家は藤星女学園を創立した家系にあたる。正確に言えば、小百合さんの旦那さんである幸人さん^{ゆきひと}の家系が、といつことになるわけだけ。

小百合さんは、わたしやゆりか^{ゆりか}さんが通う高等部の学園長を務めている。そして幸人さんは、藤星女学園および藤星女子大学全体

の理事長という立場にある人だ。

高等部以外の学園長や、理事のメンバーも、小百合さんや幸人さんの親戚の方々が担つていてるらしい。

そうすると、相当なお金持つっぽく思えるけど、実はそうでもない。

お手伝いさんを雇つてはいるものの、それは小百合さんも幸人も忙しくて、どうしても家事ができないからで、仕方なくといった感じのようだ。

それに、弥生さんは小百合さんの知人が経営する家政婦派遣会社の人だから、かなり格安で契約させてもらつてているのだとか。

もちろん貧乏なことはないけど、それでも余裕はあまりない。だからこそ、わたしは昼食代をなるべく節約するよつとしているのだ。

そうそう、わたしが小百合さんの家に養子として迎えてもらつてるのは、今話したとおり。

だから当然のごとく、戸籍上の名前は藤星息吹となつているわけだけど。

でも、学校では神奈息吹と、本当の両親の名前を名乗らせてもらつてている。

それは小百合さんが、この家の子になつたことを受け入れられずにいるわたしを気遣つてくれたからだ。

小百合さんには悪いなと思っているのだけど、わたしにとつて神奈は両親の思い出がたくさん詰まつた特別な名字。だから、その気遣いがとても嬉しかつた。

「ふう……」

部屋に入ったわたしは、カバンを勉強机の横に置いて、ベッドに腰かける。

いつもならすぐに制服を脱いで部屋着に着替えるといふだが、今日のわたしは、なんだかぼーっとしてしまっていた。

さつき見かけてビビッときた、「あの人」のことが気にかかっていたからだ。

ゆりかさんにも話したとおり、お父さん似ているから、こんなにも気になるのかな……。

お父さん……わたしが小学校一年生のときに死んでしまった、本当のお父さん……。

とっても優しくて温かい、太陽のような笑顔が、鮮明な記憶として残っている。

まだ幼かった頃の記憶までしかないから、それほどほつせつと脳裏に思い浮かべられるわけじゃない。

小百合さんから写真を見せてもらつたことがあるから、そのイメージと重ね合わせてこのだと思う。

わたしが両親を「へじてこる」とせず、ゆりかさんには話してある。

だからわたしが、「お父さんと似てた」と言つたとき、彼女の表情が陰つたのだろう。

彼女とは中等部で初めて同じクラスになつてからつまみ合つだけ

ど、お互に心を許し合つていて、今ではむづ、なんでも話せる間柄になつてゐる。

だからこそ、わたしは親友と考えてゐるわけだし、きっとゆりか「」さんも同じように思つてくれてゐるはずだ。

もしかしたらそれ以上に思つてたりして、なんて考へてしまつことがあるけど……。

でもさつさ、わたしが「あの人」を気にかけているのを応援してくれてゐるような、温かな笑顔と言葉を向けてくれた。

明日は少し早めに起きて、氣合を入れて髪の毛をセットしなきや。本当に会えるかどうかはわからないけど、それでもなんだか、とつてもドキドキして、とつてもワクワクして、考へただけで顔が熱くなつてくる。

こんな気持ち、初めてだなあ……。

なんか、いいかも。

わたしは自然とやけてしまつていた真つ赤な顔を枕に押しつけて、足をバタバタさせながら必死に恥ずかしさを紛らわせていた。

「ンンン、ガチャッ。

「お嬢様、お夕食ができました。……おや? ビジなやつたのですか?」

夕食の準備ができたことを伝えに来た弥生さんに、その様子を思いつきり見られてしまつて、さらに顔を真つ赤にする羽目になつてしまつたのだけ。

「はう、なんでもないです! もう、弥生さんつたら、ノックをしてから入つてくるまでの時間が短すぎます!」

わたしは弥生さんを押しのけるように部屋を飛び出すと、階段をトタトタと駆け下りてダイニングルームへと向かうのだった。

食卓のテーブルの上では、すでに並べられた料理たちが美味しそうに湯気を立ち昇らせていた。

田玉焼きが乗せられた熱々のハンバーグには、ポテトと甘く煮たニンジン、コーンが添えられている。ライスはレストランのように平べつたいお皿に乗せられ、その隣からはコーンスープが香ばしい匂いを漂わせていた。

小さめのガラスの小皿にはサラダが盛りつけられ、それにはワイングラスまで置かれている。当然ながらわたしには、ワインではなくジュースが用意されているわけだけど。

相変わらず弥生さんの料理の腕は素晴らしい。

わたしはゆつたりと席に着く。

すぐ手もとには、ナイフとフォークとスープ用の丸いスプーンといつた食器類が、紙ナップキンの上に整然と並べられていた。テーブル全体を改めて眺め直し、思わず感嘆の吐息と一緒に、ヨダレまでもが漏れてしまいそうだった。

食卓に着いているのは、わたしと小百合さんのふたりだけ。幸人はさんはどうやら、今日もまだ帰ってきていないようだ。

これらの料理を作った張本人である弥生さんは、わたしたちと一緒に食事をすることはない。

わたしたちが食べ終えたあと、いつもひとりで食べている彼女。一緒に食べましょうよ、と誘つてみたこともあるのだけど、それはできませんと断られてしまった。家政婦としてのごだわりなのかもしない。

両手を合わせ、いただきますと声を揃えると、わたしと小百合さんの夕食のひとときが始まった。

わたしはナイフとフォークを手に取り、真っ先にハンバーグへと狙いを定める。

なにを隠そう、ハンバーグはわたしの大好物なのだ。

「あら、息吹ちゃん、なにかいことでもあったの～？」

柔らかくてジューシーなハンバーグを頬張るわたしに、小百合さんがそう言って話しかけてきた。

え？ どうしてそう思つの？

と一瞬考えたけど、どうやらそんなの一眼瞭然なほど、わたしの頬は緩みきつっていたみたいだった。

さつき自分の部屋で弥生さんに見られてしまったにやけ顔と同じ、いや、きっとそれ以上に、にたあ～と笑顔がこぼれ落ちていたに違いない。

わたしが大好きなハンバーグを目の前にして喜んでいる、という考え方を飛び越して、小百合さんは「いいことがあったのでは？」と判断した。

そのことから考えれば、相当だらしなく、にへら～っと笑つていただろうという推論が自然と成り立つ。

普通に考えたら、すごく恥ずかしい状態。

でも、そんなことも気にならないほど、わたしはなんだか嬉しくて楽しくて仕方がなかつたのだ。

とはいえる、それを言葉して伝えられるほど、自分自身の気持ちを理解できていなかつたというのもあり、わたしはなるべく澄ました

顔で、いつ答えた。

「いえ、とくになにもあつませんよ、小百合さん」

小百合さん。

戸籍上では、今はもう、わたしの母親といつてになる彼女。

でも、わたしは「お母さん」と呼ぶことが好きになつていた。
同じよつて、幸人さんのことから「お父さん」と呼べないままだ。

それを、小百合さんも幸人さんも咎めたりはしない。

幸人は多忙で家にいないことが多いから、あまり顔を合わせないけど、小百合さんは毎日いつもやつて食事をともにする。
弥生さんが作った食事を美味しいいただきながら、いろいろとお喋りをする。

小百合さんはいつも、優しげな微笑みをたたえながら、わたしを包み込んでくれる。

それでもわたしは、どうしても「お母さん」と呼べない。

小百合さんは優しくて温かくて大好きだけど、いつもダメなのだ。

そんな小百合さん。

わたしがとぼけているのは、どうやらお見通しのようだった。

「ふふつ、息吹ちゃん、……恋……してゐるわねえ~？」

「ふ~つ~」

思わず口に含んでいたコーンスープを吹き出してしまつ。

「あらあら、息吹ちゃん、大丈夫?」

「奥様、これを」

「あり弥生さん、ありがと」

すかさず弥生さんがフキンを持つてくれる。

……つて、弥生さん、隠れて見てたの!?

もしかしたらそのうち、サスペンスドラマ『家政婦に見られた!』

みたいな状況になつたりとか……。

と、そんな失礼なことを考へてゐる場合じやないよね。

「『めんなさい、わたし……』

「いいのいいの。ちょっと意地悪しちゃつたみたいで、『めんなさいね』

小百合さんは笑顔を絶やせないままテーブルを拭きながらも、さらに意地悪な質問を続けてくる。

「それで、お相手はどんな方なの?」

「べ……べつに、お相手とか、そんなんじやないですか?」

わたしは、少し恥ずかしかつたけど、覚悟を決めて正直に話すことにした。

「えへっと、近くの男子校の生徒です。帰り道で見かけて、なんかひへ、ベベベベときたつていうか……」

あの人、面影を思い出して顔を真つ赤にしながら話すわたしに、

小百合さんは、

「ふふつ、息吹ちゃんつたら、青春してるのねえ~」

と微笑んだ。

慌てて弁解するわたしだつたけど。

「いえ、べつに、そういうのでは……」

ない……わけじやないよね……。

そう考へてしまい、無意識に言葉は途切れ、つむりいたまま頭から湯気を昇らせ続ける結果となってしまった。

ドキドキしてなかなか寝つけなかつたものの、わたしはいつの間にか眠つてしまつていたらしい。

気づけばカーテンを通り抜けて、朝の清々しい光が差し込んでいた。

田覚まし時計を見てみると、七時を少し回つたところ。

藤星文学園は授業の開始時間が遅いから、普段起きるのは八時くらいだ。

だからまだ、田覚まし時計が鳴る前の時刻。

ちよつと睡眠時間が足りないのか、頭がぼーっとしている感じを受ける。再び布団に入れば瞬殺で一度寝が成功、結果ゆりかごさんに文句を言われる羽目になつてしまつだらう。

とりあえず田覚まし時計のタイマーを切り、ゆつたりとした動作で着替える。

余裕のある時間だから、制服も乱れることなくビシッと着ることができた。

普段どおりだとあまり時間がないから、胸のリボンが曲がつていることも多くて、ゆりかごさんに「リボンが曲がつていてよ?」「なんて言われながら直されたなんて経験も、一度や二度ではなかつたりする。

そんなときは、「お姉様、ありがとうございます」とお礼を述べなければいけないのだと。同じ年なのに、どうしてお姉様なのだろう……?

と、それはともかく。

「うん、こんなもんかな」

わざわざ声に出して着替えの終了を宣言したわたしは、素早く力バンをつかんで部屋を出る。

そして階段を下り、玄関脇にカバンをそっと置くと、そのまま洗面所へと向かった。

部屋にある小さな鏡じや、制服をしつかり着ることができてはいるが正確にはわからない。その確認のためもあるけど、それよりも髪のセッティングが一番の目的だ。

寝相が悪いのか、どういうわけだかわたしの髪の毛は、朝起きると大爆発していることが多い。それを無理矢理どうにかするため、頭の両側で結んで押さええることができる髪形にしている、ところのあるわけだし。

ともかく、念入りに髪をとかしてからまとめ、綺麗なツインテールを形作る。

うん、完璧！

昨日のうちに弥生さんに話して、早めに朝食を作つてもうひとつお願い済みだ。

弥生さんは泊り込みでお手伝いをしているわけではなく、平日の朝、うちに出勤してきて、夜は夕飯の洗い物とお風呂の準備が終わつた時点で帰つていく。

ちなみに、土日と祝日には基本的に弥生さんは来ない。それでも平日はかなり長い勤務時間となるわけだから、大変だなーと思う。それがわかっているというのに、わたしは弥生さんに無理を言って、朝食を早く作つてもらうなんてお願いをしてしまったのだけだ。

「おせよハヤヒコササ、お嬢様」

「おはよハヤヒコササ、弥生さん。すみません、無理を言つてしまつて」

「いえいえ、いいんですよ。冷めないうちに、食べてくださいね。あつ、でも、急ぎすぎないでくださいましね？ のどに詰まつてしまつたら大変ですか？」

「もう、そんなこと、言われなくともわかつてます。わたし、そんなに子供じゃないんですから」

「ふふふ、そうですわよね、失礼しました。せや、とにかく食べてくださいまし。腹が減つては戦ができぬ、ですわよ」

「戦つて……、そんなんじゃないですか。それでは、いただきます」

「こんな他愛ないお喋りも、朝の心地よさを演出してくれる。

「いつもより早い時間だから、わすがに小百合ちゃんまだ起きていな」

弥生さんが食事中もずっとそばにいてくれたのは、わたしがひとりでは寂しく思つかもしれないから、だつたのかな。

とにかくわたしが食事を終え、洗面所に戻り歯磨きをすると、玄関脇に置いてあつたカバンを勢いよくつかむ。

そして、

「行つてきまーす！」

「行つてらつしゃこませ」

弥生さんが大きく頭を下げて送り出してくれる中、意気揚々と玄関を飛び出した。

待ち合せ場所である曲がり角に着くと、そこにはすでにゆりか
『いた』が立っていた。

「おはようございます、鳴歌さん」

「おはよう、ゆりかさん」

朝の挨拶を交わし合って、普段だつたらそのまま一緒に学園へと向
かって歩き出すところだけだ。……。

ゆりかさんはとわたしの耳もとに頭を寄せ、小さくしゃべ
いた。

「さて、それでさうしてしばりへ立ち話でもしながら、昨日の殿方
が通りかかるのを待ちましょ?」

「で……でも、不審に思われたりしないかな?」

対するわたしも、同じく小声で質問を返す。

「大丈夫だと思いますわよ?」

ゆりかさんは澄まし顔でやう答えてくれたけど、ビリやうわたし
の顔には不安がありありと浮かび上がっていたよつで。

「ですが心配なよつでしたら、やうですわね……お友達を待つてい
るよつに装つておきましょ?」

言つが早いが、彼女は素早くわたしの耳もとから離れると、言葉

“おつ”的演技を始めた。

「 もへ、なこをやつてこるんでしうか。由梨絵さん、遅いですわね～？」

わたしの肩に手を置き、爪先立ちで曲がり角の先をのぞき込みながら、ゆりか「わん」がわざとらしく口調で問い合わせてくる。

「あ……ひ、うん、そそそ、やつね～、ほんと、おおおお、遅すぎです、わよ」

それに答えるわたしは、焦りまくつどもつまくつ、顔も裏返つて、不自然を丸出しだった。

「ふふふ、息吹さん、演劇には向いていないみたいですね」
「…………」

「ほそつと耳もとに投げかけられたゆりか「わん」の言葉に、わたしは力なくぼやくことしかできなかつた。

ちなみにゆりか「わん」がとつせに出してきた由梨絵をさつていうのは、クラスメイトの名前だつたりする。

彼女の家は学校を挟んでわたしやゆりか「わん」の家とは反対方向なので、偶然鉢合わせするなんてことは、まずないだらつ。

由梨絵さん、勝手に名前を使つてしまつて、「じめんなさい……。

「あ……来ましたわ……」

不意に、ゆりか「わん」がわたしの肩に乗せた手に力を込め、そうつぶやいた。

わたしも、彼女と同じ方向に視線を向ける。
そこには、昨日のあの人人がいた。

早すぎず遅すぎず、ゆっくりとした動作で、今わたしたちが立っている曲がり角に向かつて歩いてくる。

見れば見るほど、心がぽわんと温かくなる感じ。

やつぱり、お父さんに似てるな……。

そんなことを考えながら、ぼーっとしているわたしの耳もとで、ゆりか「さん」がそそのかす。

「さ、話しかけなさいな」

「え……？ むむむむ、無理よお～……」

彼女の声に、わたしはぼそぼそと答えるのみ。

そりやあ、お話したいのは山々だけど。なんて言ひて話しかければいひついでいるの？

そんなわたしたちの様子に気づいているのかいないのか、あの人は曲がり角を通過し、そのまま春雨高校のあるほうへと歩き去つていいく。

わたしはその人の姿にちらちらと視線を向けながら、ただ黙つて見送ることしかできなかつた。

「ふう……」

あの人姿が見えなくなると、ゆりか「さん」のため息が聞こえた。

「まったく、臆病さんなんですか～り」

「だだだだ、だつて、しょうがなにじゃない。いきなり話しかける

なんて、できないよ~

涙目になつて訴えかけるわたしに、ゆりか『さんは優しく微笑んでくれた。

「そうですね。なにかきつかけを作らなくてはいけませんわね」

「や。」

なんとなく、優しいだけの微笑みじやなかつたように思えたのは、はたして氣のせいだつただろうか。

「まずは意識していただく」とが先決ですわ

春雨高校へと向かう人通りも少なくなると、時間差で藤星女学園の生徒の数が増えてくる。

その人が去つたあと、ゆつたりと歩き出したゆりかさんは、そのまま隣に並んで歩くわたしにそう言つた。

そしてそう言つながら、ぎゅっとわたしの左手を握る。

わたしを、勇気づけてくれているのだ。

だからきつと、他意はない……、はず……。

……そのわりに、なんだか指を絡めてきたりしてるんだけど……。

そ、それはともかくつ！

今は彼女の言葉に耳を傾ける。

「あの場所を通ることは確認できましたから、作戦は立てやすくなりましたわ。明日からも今日と同じ時間で待ち合わせして、同じように立ち話をし続けましょう。そしてあの殿方が通りかかったら、なるべく大きめの声でお喋りするんですわ」

「う……うん……」

「少しでも注目していただいて、印象づけていきましょう。そうですわ、息吹さんの名前もお呼びしますわね。そうすればきっと、あの子、息吹っていう名前なんだ、と意識してもらえるはずですわ」

「う……うん……」

ひとりで盛り上がりこるゆりかさんの声とは対照的に、わたしの声は沈み気味だった。

べつに、嫌なわけではないのだけれど。
やつぱり恥ずかしいから……。

やつぱり、ゆりか『さん』ではないでいる手の力をぐっと強めた。

「もう、そんなことどうするんですか。息吹さん、あなたがしつかりと頑張らなくてはいけませんのよ?」

「うん、そうだけど……」

「まったく……そいやつにはつせりしなじょうでしたら、わたくしがあの殿方にアタックしてしまいますわよ?」

「え、や、そ、それはダメっ!」

思わず大声で叫んでしまい、近くを歩いていた藤星女学園の女生徒たちがなにとかと振り返って、わたしに目を向けてくる。

「は、はっ……」

真っ赤になつてつむじているわたしの隣では、ゆりか『さん』が「口口口」と小気味のよい笑い声を漏らしていた。

「ふふふ、冗談ですわよ。応援しておりますわ。ね?」

「……うん」

恥ずかしがりながらも答えるわたしの声を聞いて、ゆりか『さん』は満足そうに頷いた。

「由梨絵さん、今日も遅いですわね~。昨日あれだけ念を押しまし

たのに「

「そそそそ、そり、ですね」

次の日の朝も、わたしとゆりかさんは、待ち合わせ場所の曲がり角で、白々しくも演技をしていた。

「あつ、息吹さん、あちらを『覗なさいませ』
「え？ ゆりかさん、なんですか？」

ゆりかさんは一方を指差すと、わたしもそちらへと目を向ける。彼女の指先を視線でたどっていくと、そこには、あの人があ……。でも、ゆりかさんは指差していたのは、その人ではなく、さうに向こう側。ここから微かに見える国道だった。

「今、道路を戦車が通つておりましたわ！」

……そ、それはあまりにも不自然じゃない！？と思わなくもなかつたけど、彼女は彼女なりに、わたしのためにと考えて言つてくれたはずだ。
わたしがあの人ほうをじつと見つめていても、不自然じゃないように。

……話題自体の不自然さは、この際気にしない、つてことなんだうつな……。

「え、えええ～？ うそ、ほんとお～？」

会話内容だけじゃなくて、わたしの喋り方も、やっぱり不自然ではあつたけど。

ともかくわたしは、ゆりかさんの指差すほうに目を向けた。

自然とあの人を、視界内に捉える。
思わず、見つめてしまつ。

あの人も、顔を上げた。

はうつ……！

目が……血つちやつた！

ボツ！

真つ赤になつて反射的にうつむいてしまつわたし。

「ああ、もつ……」

ゆりかごさんが小むく舌打ちする音が聞こえた。

ちょっとはしたないよ、ゆりかごさん……。

なんてツツコミを入れられるわけもなく。

結局わたしは今日も、ただ黙つてあの人があ過ぎ去つていいくのを見送ることしかできなかつた。

「ダメじやないですか、息吹さん。あの場合、微笑んで頷き合つべきでしょ？」

「そ、そんな」と言つたつて……」

「それに、息吹さんの名前を記憶していただきたいといつのに、わたくしの名前まで呼んでしまつては、血無しではありますか」

「うへへ、『めんなれ』……」

ゆりかごさんからそんなダメ出しを吸けてしまつわたしだつた。

そしてまた次の日も作戦は続く。

「今日は、遅いですわね」

「そうだね～。お休みなのかな？」

曲がり角で待っているわたしたちのそばを、いつもならあの人気がもつ通り過ぎているはずの時間。でもこの日は、まだ通つていなかつた。

諦めかけたそのとき、待ち焦がれるあの人は、やつぱりゆっくりとした動作で歩いてきた。

わたしたちの学校は授業の開始時間が少し遅いからいいけど、あの人を通う春雨高校は、この時間だと遅刻ぎりぎりなんじゃ……。

そんなわたしの心配を肯定するかのように、急ぎ足の男子生徒があの人の後ろから迫つてくる。

「おい、ゆうき～。そんなトロトロ歩いてると遅刻するぞ～！」

「うん、そうだね」

「そうだね、と言ひながらも、あの人は歩く速度を変える気配がない。

「ま、オレは先に行くけどな～」

「あははは、薄情だなあ～」

といった会話を残し、走り去る男子生徒。もちろん、あの人の中も遠ざかっていく。

「あの人、ゆうきくん、つてこうんだ……」

なんだか心がほわ～んと温まつたような感じで、わたしはただただぼーっと、ゆうきくんの去つていつた道を眺め続ける。その横では、ゆうかじさんが「ニヤニヤ」と笑っていた。

「ふふふ、お名前ゲットですわね。おめでとうござまや」

「うん……でも、どんな字なのかな~」

「ふふふ、名字もわかつておりませんし、まだまだ先は長いですわよ~?」

「うふ、わかつてぬ……」

などと、あの人のお名前を知ることができた喜びを噛みしめていたわけだけど。

わたしたちは、ゆうきくんが通りかかったのが遅かつたといつことを、完全に失念してしまっていた。

ホームルーム開始の五分前に鳴らされる予鈴が、微妙に聞こえてくる。

「あら、予鈴の音ですわ

「あや～～～！ 遅刻しちゃうー、ゆうかじさん、走らなことつー！」

「スカートのプリーツは乱れなによつこ……なんて言つていられませんわね。では、全速力ですわー！」

「うん！ 何年ぶりだろ……」

「先生方に見つかると困りますし、正門が見えましたら走るのは諦めなくてはいけませんわね。ですから途中までは、死に物狂いで走りますわよ！」

「うう、走るの苦手なのに……。もしわたしが転んだら、先に行つてね！」

「なにを言つのですか。息吹さんひとり残して、先に行けるわけが

ないじゃ ないですか！」

「うう、 ゆりかごさあ～ん！」

全力で走りながらも、 こんな友情ごと こなんてやつて いるわたしたち。 意外と余裕があつたのかも しれない。

それからも、ゆりかじさんとの作戦は続いた。

週末は学校がないから実行できないけど、平日には必ず作戦を遂行することになった。

せりには、朝だけじゃなく帰り道でもあの曲がり角に立つて、ゆうきくんが通るのを待つた。

わたしもゆりかじさんも、部活動はしていない。

ただ、藤星文学園は授業の終わる時間も遅いから、すでにゆうきくんが通り過ぎたあとといふことも多いみたいで、放課後は毎回会えるわけではなかった。

……もちろん、話しかける勇気がないわたしだから、「ひがつ」じやなくて、「見かける」だけだけど。

それでもわたしは、ただ見つめているだけで幸せな気持ちになれた。

ゆりかじさんは、じれったいと思つてゐるみたいだけど、わたしは今までも全然構わなかつた。

ゆうきくんのまつも、どうやら部活動はやつていないうらしく、だいたい授業が終わる時間から少し経つた頃、あの曲がり角を通りうだ。

曲がり角までの距離は、わたしたちの藤星文学園からのまづが近いため、急いで学園を出れば間に合つとも多い。

今日もゆうきくんに会えるかなー、なんて考へながら一つもの場所へ向かうのが、とても楽しくなつていた。

もつとも毎朝、ほぼ確実に会つてゐる、といふが見かけてゐるわ

けだけど。

そんなんある日。

いつもむじねり、ゆうつけへんに話しかけることもできず、若干沈みながら学園に着いたといひで、ゆりかじわんかじひと言われた。

「今日の放課後は新しい作戦がありますから、楽しみにしてくださいね」

「ふえつ？」

わたしが思わずだらしなく口をぽかーんと開けて、わけのわからぬ返事をしてしまったのも、不可抗力つてもものだよね？

新しい作戦つて、なんだるつ？

今日は一日中、そのことが気になってしまい、授業なんてまったく頭に入らなかつた。

ゆりかじわんに尋ねても、「ふふふ、ひ・み・つ ですわ」なんて言つて、答えてくれないし。

そして五時間目授業が終わると、ゆりかじわんは素早くわたしの手を取つて走り出した。わたしは呆然としつつも、慌てて反対の手でカバンをつかみ、彼女に引っ張られながら教室をあとにする。ちなみに藤星女子学園では、掃除は業者さんの仕事になつてゐるため、わたしたちは自分で教室などの掃除をする必要はない。

そつか、他の学校だと生徒に掃除させるのが普通なんだよね。だ

からゆづれへんの帰る時間に、わたしたちが帰る時間を合わせられたんだ。

とかなんとか考えながら、ゆづかじさんと手を引つ張られたわたしは、いつもの曲がり角へと到着した。

『キドキドキ。

胸を高鳴らせながら、ゆづかじくんが通りかかるのを待つ。今日はなぜか、ゆづかじくんも黙つたまま。普段ならうるさいくらこに話しかけてくれるのに。ついでに、やんな失礼なことまで考えてしまつ。

ゆづかじくんはただ黙つて、わたしの右手をぎゅっと握つている。

少し経つと、道の向こうに待望のゆづかじくんの姿が見えてきた。お父さんの面影がなんとなく感じじられ、安らかな気持ちになる。と、ゆづかじくんが耳もとでわれわれかけてきた。

「これからわたくしが声をかけますわ。とつあえずそのまま、黙つて横についてくださいませ」

「えつ？」

戸惑うわたしの頭に、ちよつと久しづつの「あれ」が浮かび上がる。

『ゆづかじさんを止める
『ゆづかじさんを止める』

え~と……。

考えるまでもなく、決まつてこよつたものだけだ。

でも、じんなタイミングで選択肢が「視えた」わけだから、少し慎重になるべきなのかな……？

わたしが考え込むような素振りを見せると、唐突にゆりか「わんが、ぎゅっとわたしの手を握つたまま顔を前方に回り込ませる。そして責めるような瞳を向けながら、じつ言い放つた。

「 もうひー、考える必要なんてありませんでしょ」「うへ、うへ、うへ」

わたしは頭の中の選択肢を振り払い、ゆりか「わんの言葉に従つた。

「あの、すみません」
「はい？」

ゆりか「わんは躊躇することなく、ゆりかへんに声をかける。わつあまで握つていたわたしの手は離し、代わりに彼女は両手になにやら紙のようなものを持っていた。

それをゆりかへんに差し出しながら、彼女は声をかけたのだ。

「お手数ですが、アンケートに」協力していただけませんか？」

なるほど、そういうことか。
じこはわたしも、話を合わせておくべきだよね。

「せひ、お願ひします」

ゆりかじさんを持つアンケート用紙に目を落とし、続けてかけられた声の主、つまりわたしに視線を向けてくるゆりかくん。

「わあー、こんな近くで、ゆつきくんと見つめ合ってるー。

飛び上がりそうな気持ちをどうにか抑えながら、わたしは成り行きを見せる。

ゆりかじさんの言う新しい作戦の内容を聞いていないわけだから、余計なことはしないほうがいいだろ？

「えっと、ほくでいいの？……うーん、まあ、いいけど……」

ちよっと戸惑い気味ではあるけど、肯定の言葉をつぶやいたゆりかくんの手を、ゆりかじさんはすっとつかんで引つ張る。

「では、すぐここ公園まで、じー緒してくだれこませ。さすがにここでは、人通りの邪魔になってしましますし」

「あー、うん、そうだね」

じつしてわたしめたが、見事にゆりかくんを連れ出すことに成功した。

公園に入ると、ゆりかじさんはゆつきくんをベンチに座らせ、素早く下敷きの上に乗せたアンケート用紙とシャープペンを手渡す。続けて彼女は、わたしをその隣に座らせた。

「アンケート用紙の上から順番にお签ねください。不明点はどちらの息吹さんにお尋ねくださいね」

ちよ……ちよっと、わたし、尋ねられてもわからなによ？

思わずやや口元でしまこやつなわたしを、ゆりか「やんが視線で制する。

「うん」

ゆりかくんは素直に「うん」とを聞いて、アンケート用紙に答えを記入し始めた。

「ううと、素直すぎるんじゃないかな？」

もしかしたら、騙されやすい性格なのかも？

なんて、自分が今、騙している張本人だというのを棚に上げて、そんなことを考へる。

とこりか、わたし、ゆりかくんの隣に座つてるんだ……。

「キドキドキ。

鼓動が高鳴る。

そんなわたしの横で、アンケートに答えながらも、ゆりかくんはゆりかさんと会話を交わしていた。

「恋愛についてのレポートなのですが、女子校なので、男性の考え方がどうしてもわからなくて」

「やうなんだ。でもぼくも、やうこのはよくわからないんだけど

……」

「あくまでもやくのサンプルのひとつ、とお考へください」

少しだけ、いいな、わたしもお話をしたいな、と思つたりもしたけど、ここはゆりかさん任せせるしかない。

わたしは黙つたまま、ゆりかくんがペンを走らせる音を聞いていた。

書かれた答えをのぞき込みたい衝動に駆られてはいたけど、それは悪いかな、っていうのと、近づきすぎるのは恥ずかしい、っていうのがあって、わたしはゆうつきくんの横でうつむいていた。

と、静かな公園の片隅に、不意に音楽が鳴り響く。

「の音、確かゆりかごさんのケータイの着信音だったはず……。ゆりかごさんはケータイを取り出すと、ベンチから少し離れた場所で話し始める。

「……はい、はい、え、ですが……。はあ、仕方がないませんわね。わかりましたわ」

そう言って、彼女は電話を切った。

「すみません。わたくし、一旦学校に戻らなければいけなくなりました。書き終わったアンケート用紙は、息吹さんにお渡ししておいてください。用事が済みましたらすぐに戻ってきますので、アンケートを書き終えましたら、ここにでしばらくお待ちいただけますか？」

「うん、わかった。行つてうりしゃい」

ゆりかごさんの言葉に、ゆうつきくんは優しく答える。

対するゆりかごさんも、ふふふ、と優しげな微笑みを返していた。

……それでは、頑張つてくださいませ。

去り際、そっとわたしの耳もとに顔を寄せ、ゆりかごさんはそうわざやいた。

「お友達、戻つてこないね」

「はい、そうですね……」

人通りも少ない公園のベンチで横並びに座るわたしを気遣つてか、ゆうきくんは遠慮がちにではあるものの声をかけてくれるのだけど。わたしが返事をすると、そこでビリしても会話が止まつてしまつ。

ゆうきくんは、ビリやうり自身から積極的に話しかけるタイプの人ではなさそうだった。

でもそれ以上に、わたし自身が拒絶のオーラを放つてしまつているのだね。

そりやあわたしだつて、できればゆうきくと、ちやんとお話し

たい。

だけど、恥ずかしくて、ビリしてもダメなのだ。

思えば、まだ本当の両親のもとで生活していた初等部の頃からずつと、女子校しか経験していないわたし。

わたしはひとりっ子だし、親友でよく家に遊びに行くゆりかさんもひとりっ子だ。

もちろん、昔はお父さんがいたし、今は幸人さんがいる。ゆりかさんのお父さんにも会つたことがある。

だけど、お父さんくらいの年齢の男性は、やっぱ同じ年代の男の子とはまつたく違う。

考えてみたらわたしだって、若い年齢の男性とお話ししたことすら、

今までの人生ではほとんどなかつた。

なにを話したらいいのか、どんな顔をすればいいのか、まったくわからない。

ただ向き合つだけでも、わたしの頬は一瞬で真っ赤に染まり、堪えきれずこりつむいてしまつ。

……ふえ～ん、会話が、続かな～よお～。
ぐしゃつ。

わたしの手もとで、不意に音が鳴る。

「あ～！」

その音の発生源は、すべて答え終え、しこせつあむりあくへんが手渡してくれた、アンケート用紙だつた。

「ふう、危なかつた……」

思わず握りつと握り潰してしまつといつだつた。

「どうしたの？」

「……え、なんでもありません！」

すぐそばから心地よい響きの声が投げかけられたものだから、わたしは慌てて、またしても深くつむいてしまつた。

はう、せっぱりわたしつて、ダメだ……。

落とした視線の先には、握りつぶしそうになつたアンケート用紙。

そうだ。アンケートの結果なら、話題になるかも。今さらながらにそつ考えたわたしが、くしゃくしゃになりかけた

アンケート用紙のシワを伸ばしつつ、裏返しなつていたそれを表に向け直す。

「姫宮優季……。ゆづきて、こうこう字を書くんですね」

つぶやいてから、はつと口をつぐむ。

わたしは以前から優季くんの名前を知つていて、どんな漢字なのが想像していた。

でも優季くんにしてみれば、わたしは今日初めて会つたばかりの女の子としか認識していなのはずなのに。

おそるおそる顔を上げて、ちりりと優季くんの表情をうかがつてみたけど、どうやら優季くんは、とくにそのことを気にしたりはしていない様子。

「あはは。うん、女の子みたいな名前で、おかしいでしょ？ 名字も姫宮なんてのだから、余計に女の子っぽく思われちゃうんだよね」

と、少し自虐気味に笑つた。

「そ、そんなことないです！ 素敵な名前だと思います！」

わたしは素直に、そう答えていた。

優季くんの目を、見つめながら。

その彼の瞳は、ほんとに目と鼻の先にあって……。

はうっ！

わたしが我に返つて、恥ずかしいという感覚を取り戻すよりも早く、優季くんはわたしに微笑みかけてくれた。

「ありがと。」

優季くんの吐息すら感じられる、こんな至近距離で。わたしはなんだか、ぼーっと……というか、ひとへんとした目になつてしまつ。

「えへっと、キミは……」

と、優季くんが一瞬考え込む素振りを見せる。

あつ、そうだ！ 名乗つていなかつたから、優季くんはわたしの名前がわからないんだ！

「あの、わたしは
息吹さん、でいいのかな？」

ドキン！

優しげな声で名前を呼ばると、それだけで心臓が飛び出しそうなほどだった。

わたしの名前、知つてくれてた！

「は、はい……」

浮かれ気分を抑え、どつにかこにか、ひと言だけ答える。

「わつあ、お友達がそつ呼んでたから」

あ……なんだ、そつか。それもそうだよね。知つてるはず、ないもんね。

浮かれていた気持ちが、一瞬で冷めていった。

だけど。

「いつもの曲がり角で、さつきのお友達と待ち合わせしてゐるよね
？ 息吹さんって名前も、そこで聞いた気がする」

「うわー、覚えててくれたんだ！」

なんだかもう、踊り出してしまいそうな気分。きっと顔も、にくらへ
らへつとだらしく緩みまくつていたに違いない。

「はー、そうです！ わたし、神奈息吹つていいます。よろしくお願
いしますー！」

なにをよろしくお願ひするんだか、と自分で自分にツツ ノリを入れ
れたいところだけど。

でもこのときのわたしは、もう完全に舞い上がっていた。
そりやあもう、空だつて飛べるかもつてくらい。田の前の優季くんが温かな笑顔を向けてくれているといつのもあ
つて、まさにわたしは天にも昇る勢いだった。

「うん、よろしく。ふたりは藤星文学園の生徒なんだよね？」

「は、はーー！」

「そつかー、お嬢様なんだねー」

「いえ、わたしはべつにそんな……」

次々と繰り出される優季くんの質問攻めに、わたしは必死になつ
て答える。

「藤星の制服つて、すげーおしとやかな雰囲気だよね」

「ええ、そうですよね、わたしも気に入つてるんですねー！」

「そつなんだ。でも、着ている人たちの人柄も出てるのかもね。し
つとりとした優雅なイメージがあつて、うちの生徒はみんな、高嶺

の花つて思つてゐるよ」

「そ……そんなことないです。結構普通ですよ。そりゃあ、スカートのプリーツは乱さないよつて歩くとか、イメージを大切にしている部分があるのは確かですけど……」

若干たどたどしくはあつたものの、わたしは優季くんと、こんなふつにいろいろとお話をることができた。

舞い上がつてはいたけど、それが逆によかつたのかもしれないな。さつきまでのわたしだつたら、きつとすぐに恥ずかしくなつて、うつむいてしまつていただろうし。

「ほら、時間が忘れてお喋りを楽しんでいいと、優季くんがなボソリとつぶやいた。

「うーん、そろそろ暗くなるね」

「あ……ほんとですね。ゆりか」やん、戻つてこないな……」

夕陽もすっかり沈み、もうそろそろ暗くなり始める時間になつていた。

「なにか、急な用事でもあつたのかな?」「どうかな……」

そう答えながら、わたしはきつと、ゆりか」やんは最初から戻つてこないつもりだったのだつと想えていた。

だからこそ、頑張つてくださいませ、なんて言い残したに違ひない。

せつその電話だつて、クラスメイトの誰かにあらかじめお願ひしていく、適当なタイミングで鳴らしてもうつた嘘の電話だつた可能性が高によつた気がする。

ともかく、ゆりかごさんが帰つてこないのなら、そろそろ潮時だ
わ。

わたしの住む家はこの公園から歩いても五分とかからないし、優季くんの家がどの辺りなのかは知らないけど、徒歩で学校に通っているわけだから、それほど遠くはないと思う。

でも、さすがにこれ以上引き止めるわけにはいかないよね。

「えっと、そろそろ帰りましょうか」

わたしはそう提案する。

「ん、そうだね。お友達には悪いけど……。ようじへ伝えておこでね」

優季くんも頷き、ベンチから立ち上がった。

「あっ、あの……。アンケート、ありがとうございました！」

ゆりか『じさん』が仕組んだ嘘のアンケートではあつて、いざいって時間をおいてくれたのだからと、きつとお礼の気持ちを伝えておく。

もちろん本音としては、こんなにお話してくれてありがとうございます、といつ意味も込めていたのだけれど。

「おお、これこれとお詫びもて楽しかったよ」

優季くんがまぶしこほどの笑顔を浮かべると、ふわっとその風が

彼の髪の毛を揺らした。

と、頭の中に浮かび上がる選択肢。

『あれじやあ、わよひなひ。手を振つて別れぬ』
『イリは想こわつて……』

「わっー。

思いあつて、なに?..

無意識に顔を赤らめてしまつたナビ。
でも、イリは想こわつ……。

×『あれじやあ、わよひなひ。手を振つて別れぬ』

『イリは想こわつて……』

わたしは意を決して、背を向けよひじついた優季くんに声をかけた。

「あのっー、またお会こしていただけますか?..」
「え?うふ、むちむーー。」

笑顔で、もう答えてもらえた。

涼しくなりつつある夕風を受けながらも、わたしの心はぽかぽかと温まつていくのだった。

わたしはケータイなんか持つていないし、どうやら優季くんも持つてないようで、連絡先の交換まではできなかつたけど。
でも確実に一步、優季くんに近づくことができた瞬間だった。

お母さんが、笑っている。

わたしのほうを見て、笑っている。

「ここの子にも、将来は恋人ができるたりするんでしょうね~」

ちゃんとちゃんと、わたしの鼻の頭を人差し指で軽くつつきながら、「ね~」と、笑いかけるお母さん。

「あははは、そうだね」

お父さんも、笑っていた。

忙しくて家にいないことも多かつたけど、いつも優しくわたしを包み込んでくれる。

お母さんの匂い。

お父さんの匂い。

ふたりの匂いに包まれて、わたしも満面の笑みをこぼしていた。

「あなた、娘はやらん! とか言って怒鳴つたりしないでくださいよ?」

「う~ん、約束はできないかな~……」

「もう、あなたったら」

お母さんは、うふふ、と、笑い声を空気に乗せて響かせる。

手入れの行き届いた綺麗なリビングルームは、幸せいっぽいの空氣で隅々まで満たされていた。

お父さんとお母さんが仲よくお喋りしているのを、笑顔で見つめるわたし。

わたしはふたりの笑顔が、とっても大好きだった。

今では記憶の中でしか見ることのできない、ふたりの笑顔が。本当に本当に、大好きだった。

わたしは優季くんが公園から去つていったあとも、じばらくぼーつとその場に立ち尽くしていた。

ばーっと、といつか、さつきも同じだつたけど、にへらーっとした、気色の悪い笑みをこぼしまくつていたかもしれない。

お嬢様学校と名高い藤星女学園の制服に身を包んだまま、だらしない、ちょっとおかしな笑顔で立ち尽くすわたし。

人通りの少ない公園だから、誰かに見られたりはしなかつた……と思つ……けど、どうだろ?……?

じばらくして、変な噂とか立つてたら嫌だな……。

なんて、我に返つて考えられたのは、家に帰り着き、自分の部屋に入つてからのことだった。

つまりは、家まで戻つてくる帰り道も心こゝにあらず状態だったわけで。

もちろん、出迎えてくれたお手伝いの弥生さんには、確実にわたしのにやけ顔を見られてしまつたことになる。

思い起こしてみると、さつき夕飯の準備ができると呼びに来たときも、なんだか必死に笑いを堪えていたような気が……。

弥生さんには、またしても弱みを握られてしまつたかもしれない。

『家政婦に見られた!』 第二話 お嬢様の壊れた微笑みの秘密。

つて、なにを考へてるんだか……。

あまりにも優季くんのことが気になつて、夕食の時間も心こゝにあらず状態のまま、小百合さん今まで心配をかけてしまつたし……。

「お嬢様、お電話です……って、なこをななつてているのですか？」
「ひやつひー。」

「バシッ！」

夕食後、自分の部屋に戻ったわたしは、両手で思いつめつ自分の頬を叩いて気合を入れ直す。

「はい、ちゅうと強すぎた！　すぐ痛い……。」

鏡をのぞき込んでみると、両方のほっぺたが真っ赤になっていた。
うー、ほんとにもう、なにやつてんだか……。」

「バシッ。」

そのままわたしは、ベッドに倒れ込む。

「でも……。」

優季くんと、あんなにたくさんお喋りできるなんて。

そう考えた途端に、痛みが引いていた頬が、再び真っ赤に染まる。

むひろん今度の赤味は、痛みを伴わない、むずがゆいっぽいの赤だったわけだけど。

「はいー。」

思わずベッドの上でじるじると左右に転がってしまひ。
はしたない！」「はしたない。

「と、そのと、
ガチヤッ。」

こきなりドアを開けて顔をのぞかせた弥生さん、「またまたまたしても醜態をさらすことになってしまった。

弥生さん、ノックくらいこしてよ……。

なんて文句の言葉すら出てこない。

『家政婦に見られた!』 第三話。『転がるお嬢様の謎』。

わけのわからない妄想を振り払い、わたしは赤く染まつた顔を必死に枕で隠す。

と、それよりも。

「あ……あの、電話つて、誰からですか?」

焦りをどつにか抑え、弥生さんに尋ねると、

「ゆうか!」やんです」

との答えが返ってきた。

「ふふふ、どうでしたか? 上手くこきました?」

「ゆうか!」やんの第一声。

つまり、やつて公園に戻つていなかったのは、やっぱり彼女の作戦だったということになる。

「チューべりこは、しましたか?」

からかいつの話で、そんなことまで記していく。

「 もひ、 ゆりかじさん！ そんなわけないじゃない。 お話をされるのも、 今日が初めてだつたのに」

「 あら、 世間では初めて会つたやの口ひ、 もひと先まで行つてしまわれる方もいるらしこですわよ？」

真っ赤になつて答えるわたしに、 ゆりかじさんはさうなる言葉を平然と放つ。

も……もひと先までつて……。

考えただけで脳みそが爆発寸前の状態に陥つてしまつ。

「 ふふふ、 今、 想像しましたわね？ 息吹さんつたら、 え・つ・ちなんですから」
「 ゆりかじさん！」

わたしはしづらべのあいだ、 ゆりかじさんから、 こんな感じでからかわれ続けた。

予想していたことではあつたから、 とりあえず恥ずかしがりながらも、 親友との会話を楽しむ。

「 ……それで、 実際のところはどうでしたの？」

しばらく経つと、 からかいつにも飽きたのか、 彼女は唐突にやつ尋ねてきた。

「 うふ、 えつとね……」

その頃にはすでに、 恥ずかしさやら焦りやらの気持ちが和らいで

いたわたし。

素直にさつきの公園での出来事を、細かく報告する」とした。
それを聞いて、ゆりか「さんも喜んでくれた。

「あらあら、息吹さんにしては上出来じゃないですか～」

……若干引っかかる言ご方ではあつたけど。

そして彼女は、

「もうですわね、あとはデートなさい、そのまま恋人同士になつてしまつのがよろしいですわね～」

そもそも当然そう、「そんな」とをのたまひ。

「え……。『テテテテ』、『デートだなんて、そんな……』」

「なにを恥ずかしがつておりますの？ それとも、『デートをすつ飛
ばして、次のステップに進んでしまいますか？』

「はう、次のステップつて……」

「息吹さん向けだと、チューですかしら」

「わたし向けつて……」

なんだか、ちょっとバカにされているような気がしないでもない。
でも、ちょっと面白がつているのは確かだらうけど、ゆりか「さん
が喜んでくれてているのは、しつかりと感じられた。

「ふふふ、わたくしも協力致しますわ。大船に乗った気持ちで、ど

ーんとお任せくださいな。ふふふふふ……」

「そ、その笑い、ちょっと怖いんだけど……」

「あり？ なにか言いました？」

「い……いえ、なにも…」

……やっぱり面白がられている比率のほうが、圧倒的に高そうな
『氣』がするわたしだった。

それからは、学校帰りには曲がり角で待ち合わせて、公園でお喋りする毎日となつた。

わたしと、優季くんと、ゆりかごさんの三人。

そう、ふたりきりになるのは恥ずかしいから、ゆりかごさんにも一緒にいてもらつていい。

ゆりかごさんは、公園に着いたらすぐに帰ろうとしていたみたいだけど、それをわたしが引き止めた。

だって、ふたりきりじゃ、時間がもたないから……。

相変わらず、わたしつてダメだなつて、思わなくもないけど。

お願い、と必死に頼み込むわたし、「しょうがないですわね」と、ゆりかごさんもベンチに座つてくれた。

ただ三人でお喋りするだけの、安らかな時間。

いつもはうるさいくらいのゆりかごさんも、ここでは控えめにしてしてくれる。

学校帰りだけのお喋りタイムだから、今のところ、休みの日はで会つたりはしていないけど。

それでもわたしにとつて、この瞬間は温かくて優しくて、とてもとても大切な時間だつた。

「今日は雲が多くてどうぞうしてるよな

「そ……そうですね。まだ梅雨の時期じゃないですか、でも、わ

たし、梅雨つて結構好きなんですね。……。変わってますよね?」

「普通はじめじめして嫌いだつて人が多そだもんね。でもね、実はほくも、梅雨つて好きなんだ」

「あっ、やつなんですか！一緒にですねー！」

「うん、お揃いだね」

「はい、お揃いですー！」

わたしと優季くんのちょっと間抜けなやり取りを、ゆりか「さん
が温かな田で見つめぬ。

「どうか、生温かな田とか白い田とか、そう表現したほうがいい
のかもしれないけど。

たまに小さく、はあー……と、ため息を漏らす音まで聞こえてく
るし。

「梅雨のなにがいいといつのですか。わたくしは嫌いですわ。湿氣
で髪の毛が広がってボサボサの「ねうねのひつどい状態になります
しー。」

「でもゆりか「さんなら、髪が跳ねても綺麗だと思つ」
「あっ、そうですね、わたしもやつ思つ！ ピシッとしてるゆりか
「さんも素敵だけど、ちょっと氣を抜いてる感じも可愛くていいで
すよね！」

「うんうん、そのとおりー！」

「なんなんですか、それは。まつたくもん……」

明らかに呆れ顔になりながらも、微かに頬を赤らめて視線を逸ら
す。

あ……ゆりか「さんでも、恥ずかしいものなんだ。

いつもわたしがからかわれてばかりだから、これからは反撃し
ちゃおうかな。なんて考え、思わず笑みをこぼす。

わたしの隣では、優季くんも同じように微笑んでくれている。
楽しくて温かな時間。

無理矢理つき合わせてしまって、ゆりか「さん」は悪いことは思つ

し、彼女はじれったく感じてこなだらうけび。それでもわたしは、優季くんと時間を共有でき、とっても幸せだった。

公園の前で優季くんと別れたあと、いつもの曲がり角までゆりかじると一緒に歩いていると、彼女がぽつりと不満を口にした。

「まつたく、わたくしをネタにしてお喋りしないでいただきたいですわ」

でもその声は、強く非難をするようなものではなく、温かな微笑みを含んだ優しい響きだった。

「「」みんなさい。でも、あまり話すの得意じゃないし、どうしても視界に入ったものを話題にしちゃうの……」

「わたくしはもの扱いですか？ ひどいですわね。それに、いいんですか？」

「え？」

「恥ずかしいですけれど、わたくしのこと、綺麗だなんて言つておりましたわよ。息吹さんまで一緒になつて可愛いだなんて。そこは、わたしのほうが可愛いでしょ？ とか言つて、自分に注目してもらひついできといひではありますか？」

「あ……」

ゆりかじさんの言葉を聞いて、そうこえぜやうかもと、今さらながらに納得する。やさぐに、自分のまつが可愛いってのは、言いますぎだとは思つたが。

「それなのに息吹さんったら、わたしもやつ思つだなんて。う……嬉しいですけれど、ちょっとどうかと思ひますわよ？ もしかしたら優季さん、わたくしのまつを好きになつてしまふかも知れないじゃないですか」

いつもよりも早口でまくし立てる彼女。微かに顔を赤くして恥ずかしがつてゐるみたい。

なんか、可愛い。

と思つていたら、

「わたくしのまつが確実に美人なんですから」

ゆりか「さんたら、平然とそう言い放つた。

わあ～。どこからそんな自信が湧いてくるんだら？。普通、自分のことをそんなふうに言えないよね。

もつとも、確かにそのとおりだとまつは思ひ、ゆりか「さんと言われたら、納得せざるを得ないけど……。

「やつよ、ゆりか」さんは肌も髪もつやつやで、すりつと細く、それでも出るところは出していく、黙つていれば美人で……」

思わずつぶやいていた言葉に、彼女は眉をつり上げて歯みつしていく。

「黙つていればって、どうこう」とですか！？

「い……いえ、なんでもありますん！」

慌てて「まかすわたしに、ゆりか「さんは優しい口調で問いかけてきた。

「それでは次回から、わたくしは先に帰つて、ふたりきりにしまじょうか？」

そつか、ゆりか『さんはわたしが思いきれるよう』に、あんなふうに怒つた演技をしてくれたんだ。

だけどわたしは、彼女の想いに応えられず、

「……うつと、やつぱりまだダメ！ 一緒にいて、お願ひ、ゆりか『さん』

そう懇願する。

だつて、ふたりきりになつたら、絶対に喋れなくなつちやうもん。ゆりか『さん』がいてくれるから『わ』、わたしは安心して優季くんと話せるんだから。

わたしの答えを聞いた彼女は、案の定、小さくため息をこぼす。

「ふう、わかりましたわ」

「……『めんね、ありがと』」

うつむき加減のわたしに、ゆりか『さんは温かな笑顔を向けてくれる。

「まあ、そんな息吹さんだからこそ、わたくしはこんなにも大好きなのですわ」

彼女はそう言いながら、わたしの右手をぎゅっと握りしめてくれた。

「ゆりか」さんに迷惑をかけてしまって「」と後ろめたく思ひながらも、わたしはそれ以上に、優季くんとたくさんお話をできたことで浮かれていた。

家の玄関をくぐり、自分の部屋に滑り込んでからも、顔は自然とにやけてしまう。

弥生さんがいきなり入ってきたら、また醜態をさらしてしまつことになるなんて、考える余裕もなかつた。

ぱーっと制服のボタンを外す手も止まりがちで、なかなか脱ぐことができず、部屋着に着替えるのもいつもの何倍も時間がかかるつた。

部屋着のほうはボタンもないし、すぐに着ることができたけど。にやけ顔のまま着替えを終えたわたしは、制服をハンガーにかけてクローゼットにしまう。

と、その瞬間、弥生さんが襲来してきた。
「ンンン。

「お嬢様、夕食の準備ができました」

ガチャリ。

ドアを開けて部屋に入つてくる弥生さん。
でも今日は、ノックの音で一瞬早く気づくことができた。

「あら、弥生さん。ありがとうございます。すぐに行きますね」

わたしは落ち着いた声で答える。

うん、今日は完璧。

なんて余裕をかましていたら。

あれ？ 弥生さん、必死で笑いを堪えてる……？

「お……お嬢様、上着が後ろ前ですわ。もう、小さい子供じゃないんですから。ふふふ」

「はうひー。」

視線を下げてみると、彼女の指摘どおり、わたしの上着は前後逆の状態だった。

「ともかく、お食事、できておりますからね」

弥生さんは笑いを堪えながら、といつか、ふふふと、堪えきれなくなつた笑い声を漏らしながら、わたしの部屋を去つていつた。しかししてまたしても、弥生さんに恥ずかしい姿を見られてしまつ結果となつてしまつた。

ああもう、弥生さんにはいつたいどれだけ、わたしの恥ずかしい話を提供していることだろう。

いつか彼女がうちのお手伝いさんを辞めることになつたら、口封じに消すしかないかも知れないわね……。

そんな物騒な考えを思い浮かべながら、わたしは上着に手をかけた。

食卓に着くと、小百合さんはなんだか面白がり、「ヤーヤー」と笑いながら話しかけてきた。

「ふふつ、息吹ちゃんは相変わらずですね～。上着はちやんと確認してから着るんですね～？」

「ふつ！」

美味しそうな匂いを漂わせていたオーロンスープを、今まさに口に含んだところだったわたしは、思いつきり吹き出してしまった。はう、またこのバターン！？

と思わなくもなかつたけど、むせ返つてこるわたしには、弁解やら謝罪やらの言葉を吐き出す余裕すらない。

「あ～あ～、」めぐなさこね～

笑顔のまま、わたしに謝辞を向ける小百合さん。

「奥様、フキンです」

「まあ、弥生さん。いつもいつも、悪いわね～」

弥生さんはかさかさのフキンを持つていて、そんな小百合さんに手渡した。

どうやら弥生さんは、隠れてこひらの様子を見ていたようね。いつもどおり。

なんやかんやと慌ただしくなつてしまつて食卓にも、随分慣れてきた感がある。

素早くわたしが吹き出したスープを拭き、フキンを弥生さんに渡すと、なにごともなかつたかのように、夕食の時間は再開された。自分のせいではあるけど冷めかけてきていた料理の優しい味を楽

しみながら、わたしはこつものよつこひかわさんとのお喋りを続ける。

「それにしてもせつときから、随分と嬉しそうですよね～。浮かれているといふといふか～……。あつ、もしかして、このあいだ話していた方と、上手くいったのかしら～？」

楽しく会話をしていると、急にそんなことを言われ、わたしは思わず顔を真っ赤に染める。

「あらあら、図星なの～？ 息吹ちりやんにも、ようやく恋人ができるのねえ～。ふふつ、これはお祝いしなくてはいけないわねえ～」「えつと、その、いは…… 恋人とかってわけじゃないんですけど～！ でも、お話とかはするよつになつていて……」

恥ずかしくはあつたけど、でもなんだか嬉しくて、聞いてほしくて、わたしは必死の想いを言葉に乗せる。

そんなわたしの様子を、小百合さんはじつも以上に温かな瞳で見つめてくれていた。

「ふふつ、やう……、もつそんなお年頃なのねえ～。吐息^{ヒュキ}にも見せてあげたかったわ～」

不意に、空氣の流れが止まつたような、そんな気がした。
わたしはあまり気にしてはいなかつたけど、小百合さんはずくへ
氣にしていることだから……。

小百合さんは、しまつた、といったようなバツの悪そうな表情になつて、口に手を当てたまま黙り込む。
吐息、というのは、死んでしまつたわたしのお母さんの怨霊。

重苦しい沈黙が流れる。

いたたまれなくなつたのか、小畠曾わんせ、そそくせと席を立つた。

「「めんなさ」……のどが渴いたので、お紅茶を用意してくるわねえ～。息吹ちゃんも、飲みたいかしら～？」

「あ～、はい、お願こしあす」

わたしは努めて自然に微笑み返しながら答へる。

「そんに氣こあることなこのこ……」

小畠曾わんせ、小畠曾わんせの聲中こまでも腫へいとはなかつた。

小百合さんはあのあと、なにごともなかつたかのよつこつもどおりの笑顔をたたえながら、紅茶のカップを乗せたお盆を持って戻ってきた。

もつ氣にしていない様子だつたから、わたしも氣に病んだりせず、小百合さんとお喋りを続けることができた。

といつても、次から次へと繰り出される小百合さんの質問に、わたしが恥ずかしく思いながらも答えるだけだったのだけど。

夕食を終え、わたしが部屋に戻つてのんびりしていると、弥生さんがやつてきた。

「お嬢様、お風呂が沸きましたよ」

「あつ、わかりました。ありがとうございます」

「今日はたくさん汗をかきましたでしょう? ふふふふ

「……」

なんだか弥生さんつて、わたしを小バカにしてる感じがしなくもないわ……。

そんな不満を胸に抱きつつも、わたしはお風呂場へと向かった。

ゆつたり広々とした湯船に浸かりながら、わたしはこうこうと考えていた。

優季くんとたくさんお話できて、嬉しくて樂しくて、舞い上がってしまいやうなほどのわたしではある。

でも、どうなのかな?

このまま、恋人とかになれるのかな?

はう、恋人だつて、せやつ、恥ずかしい！

でもでも、そうだよね、ずっと今みたいに、お話だけしても、
お友達のままだもんね。
だけど、だけど……。

ふくふくふくふく。

お湯のせいでだけでなく赤くなつた頬を湯船に沈めて、意味もなく
息を吹く。

あ……じんなふつに思ににふけつてると、ふやけちゃうかな？
考えてみたら、もうかなり長い時間、お風呂に浸かつていてる気が
する。

ふやけて「ヨヨヨになつちやつたら嫌だし、わたしは素早く湯船
から飛び出した。

脱衣所に戻つて体をしつかりと拭き、パジャマに着替えたわたし
は髪を乾かしながらも、そらにぼーっと考え続けた。
さすがにちょっと暑かつたから、換気扇を回している。
その音が響く中、自分で自分に問いかける。

わたしはいつたい、どうしたいのだろう？

換気扇による気流のせいか、微かな風がわたしのうなじをくすぐ
る。

そのとき、選択肢が頭に浮かび上がってきた。

『今まで我慢する』
『もつと進展したい！』

恥ずかしいけど……。やうやあやつぱつ……。
わたしはゆうべつと、頭の中で一番田の選択肢を強くイメージする。

×『今ままで我慢する』
『もつと進展したい!』

「ふふふ、やうよね。

「え……?」

不意に声が聞こえたような気がして、わたしは慌てて辺りを見回した。
もしかしたら、わたしが知らず知らずのひきに声に出していく。
弥生さんが隠れて見ていたのかも。
やう考えてみたりもしたのだけど。

いくら見回しても、誰もいるような気配はなかった。
換気扇の微かなブーンといつ音だけが、不気味さを伴って鳴り響いていた。

ブルッ。

背筋の震えを感じる。

せつかくお風呂に入つて温まつたはずなのに、寒さすら感じてしまつぱど。

「…………『氣のせこ』だよね…………？」

わたしは誰にともなくつぶやく。
なんだかちよつと氣味が悪かつたけど、単なる空耳、そうに決まつている。

そうよ。

わたしが優季くんとお話をきて、浮かれすぎていたから。
あまりに浮かれすぎて、大失敗をやらかしてしまって、そくなべらい
だつたもんね。

きつと神様が、少しほのめくよつこと、『氣遣つてくれたに違
いない。

わたしはそう考へることにした。

それはあながち、間違いといつわけでもなかつたのだね。

といつあえず、大きく深呼吸をする。

「うふ。落ち着いたわ。さてと、それじゃあお部屋に戻つて、そろ
そろ寝ようかな」

わざわざ机に近づいて、わたしはお風呂場をあとにした。

「うふふ、おやすみなわー。

なんとなく、背中からそんな声がかけられたような『氣』がしたけど、
わたしは空耳だと自分に言い聞かせ、素早く部屋に戻るビッグドームに
潜り込み、頭から布団をかぶる。

思つた以上にお風呂場に長居してしまつていたらしく、いつもな
りとくに寝入つてゐる時間になつてゐた。

さつきの声が気になつて、さすがにすぐには眠れなかつたけど、いつしか睡魔に包まれたわたしは、そのまままどろみの中へと落ちていつた。

もしもさつきの声が、寝静まつたあとだと思つて侵入してきた泥棒の声だつたりしたら、すぐ危ないとこらだつたとは思つ。でもわたしは、そうじやないことだけは、なんとなく感じていた。だからこそ、怖がりながらも、そのまま眠つてしまふたのだ。どうしてそう思えたのか、このときは全然わからなかつたけど、もう少しあとになつてから、わたしはその理由を知ることになる。

わたしと優季くんの公園でのお喋りタイムは、今日も続いていた。もちろん隣には、ゆりか、さんもいる。

いつもどおりの他愛ない会話に、呆れ顔ながらも我慢強くつき合つてくれている彼女。

ほんとに、どれだけ感謝しても足りないくらい。

三人でのお喋りタイムは、いつものようにほとんどわたしと優季くんのふたりでお喋りして、こつものよつて音でたまへないうおでかけついで音でたまへないうおでかけついで、開きとなつた。

ベンチから離れ、公園の入り口に向かって会つ。

優季くんは公園から出で左の道、わたしとゆりか、さんは右の道が帰路になる。

手を振り合ひ、それじゃあ、また明日、と挨拶を交わすといひで、わたしがポンとつぶやいた。

「あの、わろそろテスト期間だし、優季くんもテスト勉強しますよね。こうやって遅くまでお話しするのは、じぶんもやめたほうがいいのかなあ……？」

わたしとしては、それが当たり前かな~と思つたから、やつぱりただけなのだけど。

ゆりか、さんは怒濤の勢いで反撃してきた。

「なにを言つてるんですか！ そんなの、関係ありませんわよ。」「でも、テスト勉強の時間を減らして、優季くんに迷惑をかけるわけには、いかないと思つし……」

わたしは、遠慮がちに自分の意見を返すなど、ゆづかぐこの勢いは止まらない。

「おバカさんですわね、迷惑だなんて思つわけわけないじやないですか！」ねえ？

「うん、やうだよ」

優季くんも、微かな笑顔のまま、そう言つてくれた。

それでもわたしは、まだ納得がいかない。

その様子を察してくれたのだろう。ゆづかぐこのは考え込むような仕草をすると、すぐにポンと手を打つた。

「それでは、じつしましょ。お勉強会とこにこにして、一緒にお勉強すればいいんですわ。これなら、余っている時間をテスト勉強の時間と共有化できますわよー！」

グッズアイディアでしょ。…とでも言つたげな瞳で見つめてくる彼女。

「え……でも……範囲とか違うんじや……」

「同じ空間でお勉強する、それだけでいいんです。範囲なんて、関係ありませんわ」

小さな声で反論するわたし、ゆづかぐこのはつと顔をこきつた。

せりへ、

「場所は……、できれば優季さんのお部屋がいいんですけど……」

なんて、図々しい提案まで続ける。

「……こぐらなんでもそれは悪いよー。」

と囁いながらも、そつなつたら嬉しいなと密かに期待を込め、わたくしはおずおずと視線を上げると、優季くんの反応をつかがつた。

「……。

いつもどおりの、心をぽわ～んとさせてくれる温かな笑顔。
そして、

「うそ、いいよ」

優しい声で、優季くんは答えてくれた。

というわけで早速、次の日の放課後、わたしたちは優季くんの家に向かっていた。
いつも曲がり角で待ち合わせしたあと、公園の前を通過して、そのままさらりと先へ。
優季くんの先導に続いて歩くあいだも、いろいろとお喋りしながらの道中。

「両親が共働きで帰りはいつも遅いから、夕方のこの時間にいることないと話してくれた。
どうやら兄弟もいないらしい。
ところは……。」

「あら、ふたりきりになれるチャンスじゃないですか」

「ゆづか！」さんはわたしの耳もとに顔を寄せると、面白げに「やつれやつれ、わらわ、元気！」

「ふふふ、わたくし、用事ができたと言つて、すぐここに帰りましょ！か？」

なんて言つ出す。

「や、だ、だ、ダメ、ゆづか！」さんは、いつまでも、ふたりきりは、さすがにまだ、ちょっと……」

慌てながら答えるわたしに、いつもめぐら、呆れたため息をつく彼女。

よつこつやうの手声で、ニヤニヤしながら、いつ言つた。

「まつたぐ、意氣地なしですわね。わたくしがいたら、キスもできなにじやないですか」

「そそそそ、そんなこと、まだ恥ずかしいからこいんだもん！」

「ん？ なにが恥ずかしいの？」

思わず大顔を出していたわたしに、優季くんが首をかしげながら訊いてくる。

「こや、あの、『あなたさい、なんでもないです！』

必死に『まかすわたしの顔は、耳まで真っ赤に染まつて』いた。

そしてゆづか！さんは、そんなわたしを見て、おなかを抱えて笑

つていた。

「 も、どうだ？」

「 はい、お邪魔します」

カギを開けてから玄関のドアを開けたわけだから、やつを聞いていたとおり、家には誰もいないのだろうとは思つたけど。
それでも一応、失礼にならないよう声をかけてから、上がらせてもらつた。

「 汚い家でごめんね。それに狭いし。お嬢様のふたりにこんな家に来てもらうなんて、やっぱり悪かつたかな？」

「 い……いえ、そんなことないです！ とても綺麗にしてあると思います。お母様が、しつかり掃除なさつてるんでしようね。それに、わたしたちのほうが押しかけたようなものですから、悪くなんて全然ないです！」

優季くんのいつもの笑顔が少し曇りがちだったこともあってか、わたしは必死になつて言葉を並べる。

もちろんそれはお世辞なんかじゃなく本心だ。

わたしが住んでいる小百合さんの家や、ゆりかごさんの家と比べたら、確かに狭いのは間違いない。

だけど、広ければいいってものじゃないと思つ。

小百合さんの家は弥生さんが掃除してくれているから綺麗だけど、わたしの部屋だけは、勝手にいじられたくないというのもあって、

掃除は自分ですると呟つてあった。

そのせいで、部屋の中は結構散らかっている。

「ミミが山のように積み重なっているとか、脱いだ服がそこら辺に散らばっているとか、そこまでひどい状態ではないけど、几帳面とはお世辞にも言えない性格のわたしから、ちょっとと雑然としていることが多い。

わたしの部屋と比べたら、優季くんの家はずつと綺麗だと思つた。

それに、なんだかちょっと、なんかのお花のようないい香りがするし。

優季くんは少しばかり笑顔を見せると、わたしとゆりかごさんを、家の奥へと案内してくれた。

家の奥……そこはもちらん、優季くんのお部屋だった。

生まれて初めて入る、男の子の部屋……。
わたしは緊張して、思わず足が震えてしまつ。

優季くんがふすまを開けて、中に導いてくれた。

そつが、優季くんのお部屋は、畳の和室になつてゐるんだ。

「散らかって恥ずかしいけど、どうぞ

「お邪魔しま～す……」

ふわっと、温かな匂いが包み込む。

家の中に入つてから感じていたお花のような香りとせ、また違つた匂い。

ベンチで隣に座つてこると感じていた、微かな優季くんの匂い。

それが今こじれでは、はつきりと感じられる。

「ちょっと、息吹さん、そんなにじぶんじぶん見るのは、失礼ですわよ

？」

「あつ……ー」

わたしは思わず、きよらきよらと隅から隅まで、優季くんの部屋の様子を丹念に焼きつかるように眺めてしまつていた。

「うわ、うめんなぞこつーーー。
「こや、べつにこよみ、気にしないこで。とつあんず、いいに座つて

せうすつじ、優季くんはふたり分の座布団を用意してくれた。

「あつがとわ

「こわなつじ」めぐ、トイレに行ひてから、ひよつと街ひてて
「ね

優季くんはそう断りを入れて、部屋から出でていった。

それにしても落ち着かない。

座布団に座つたまま、わたしはまたしても無意識のつけで部屋中に視線を巡らせていたらしい。

「ふふふ、気になりますのね？ お部屋の中、こうこうと調べてみます？」

いたずらっぽい笑みを浮かべながら、ゆりかじれんがそんなことを言い出す。

せりに続けて、「んな」とまでも。

「あつと、Hツチな本なんかも、隠してあると悪いままさよ？」

わたしは思わず真っ赤になつて反論する。

「そそそ、そんなのないもん！ たぶん……。それに、勝手に部屋の中をいじるなんて、ダメだよ！」

「ふふふ、そうですわね、息吹さんもお部屋に隠してあるものを見つかつたら、大変ですものねえ？」

「な……なに言つてゐるのよつ！ わたしはべつになにも……！」

「あら？ プリントアウトして差し上げた優季さんとの写真も、隠さず堂々と置いてありますの？」

「う……！ で、でも、部屋にはないもん！」

「あ～、肌身離さず持つておつますのね」

「あへ、…………うん……」

どう考へても、わたしのほうが部が悪い。

ゆうか「せんと聞こへし」をした場合、ほぼ確実に同じような流れになる。

やつぱりわたしつて、ゆうか「せん」には勝てないんだな、というのを実感した。

「それにしても、殿方のお部屋での「」、綺麗に整頓されておりますわね。必死になつて掃除したのでしょうか？」

突然話題を変える彼女。つまり、勝つたことを語つたのだ。ま、いいんだけど。いつものことだし。

「あひと普段から綺麗好きなのよ」

わたしも新しい話題に乗り、そう答える。

するとゆうか「せん」は、意外な言葉を返してきた。

「せうかもしけませんけれど、もしやつだとしたら、ちよつと問題

かもしだせんわよ?」

「え? どうして?」

わたしの疑問に、彼女はためらいしなく言い放つた。

「息吹さんのお部屋と、じけいが綺麗かを考えましたら……、答えはおのずと出ると思こあすけれど」

「は、はい……」

「うこうこう」とか一

つまり、わたしの部屋を優季くんに見られたら、だらしない女の子だと思われて、嫌われちゃう、ってことだ。

「うう……、優季くんをわたしの部屋で呼ぶ」と、絶対にできなことわ……」

頭を抱えるわたしを、ゆうか「わざは面白がり見つめている。

「ふふふ、大丈夫ですわよ。その程度で嫌うよつた殿方ではありますわ、優季さんは」

「ゆうか」をうつたらい、もう一、「

つまり、わたしはからかわれたんだ。

……でも、あれ?

そうすると、わたしの部屋は汚いって、認めてるひとにならない。ちよつと無然とした表情を浮かべるわたしだった。

「遅いですね」

しばらく他愛ないお喋りを続けていたが、ゆりか「わんがポシリとつぶやいた。

確かに優季くんは、トマトに行つたきつ、一向に戻つてくる気配がない。

「……大きいほうでしょつか？」

「ちょ、ちょっとゆりか」「わんー！」

そんなことを言つたら、さすがに悪いよ。

彼女に文句の声をぶつけよつとしたそのとき、すつと、ふすまが開かれた。

「お待たせ。紅茶を淹れてきたよ。お菓子もあつたから持つてきた。あ……でも、こんな庶民的なのは、お口に合わないかな？」

「」と笑顔を浮かべて、お盆に載せたお皿やカップを運んできてくれた優季くん。

「そそそそ、そんなことないです！ ありがとうございます！ わあ～、わたし、ポテチ大好きです！」

ちよつとはしたない詮索をしていた後ろめたさも手伝つて、わたしは不自然なほどに、はしゃいだ声を上げていた。

「はい、息吹ちゃん、あ～ん」

「あ～ん！」

わたしはお母さんが指でつまんで田の前に差し出したそれに、勢いよくかぶりつぐ。

ぱくつ。

かぶりついた瞬間に、

パリッ！

心地よい響きが奏でられる。

破片が周囲に散らばってしまいそうではあるけど。そんな細かいことを気にするのは無粋つてものだ。

口の中に引き入れたそれを、わたしはまだ小さかつたはずの歯で細かく噛み碎く。

そのたびに、パリパリパリッと音が鳴る。

「ポテチって、パリパリおどがして、とってもおいしく～～！」

「うふふ、よかつたわね～」

わたしが満面の笑みを浮かべると、お母さんも同じよひに笑顔になる。

「それじゃ、わたしも……」

パリッシュ。

お母さんもひとつのポテチをつまむと、少しへ口を開けて上品くわえる。

「あさ、おかあさん、わたしのぶんが、くつかや～」

「つふふ、『いめんなれ』。でも、少しくらいこ、いじやないの。ね？ お母さんにも、ちょつだい？」

「へ……。うん、わかった。でも、ちよひとだながだよ？」

「つふふ、ありがと」

他愛ない、おやつビキの会話。

「でも、こんなもの食べさせてもいいのかい？ 吐息だつて、お屋敷では絶対に食べさせてもらひなかつただろ？」

笑顔が咲き乱れるわたしとお母さんに、真面目な顔で水を差すような言葉を放ったのは、お父さんだった。

休日だったから、お父さんも一緒におやつの時間を楽しんでいたのだ。

「せつやあ、ぼくたのひは正式に認められたになにか？」でもキミはおお屋敷のひとつ娘で……

少し寂しそうな表情を纏あおつむきながら、お父さん任せう続けた。

「爽時さん……。そんなことおひしゃりなこで。わたしはあなたの妻ですか？」

お母さんは温かい笑顔で、お父さんを包み込む。

「 ほんの普通の生活ができる、わたしはとても幸せなんですよ」

「 とっても、いい雰囲気だな。」

幼いわたしでも、その温かな空気はじっかりと感じられた。

「 おとうさんとおかあさん、ひびひび～。ちゅーーん、しないの～？」

笑顔でふたりの様子を眺めていたわたしの言葉に、お父さんもようやく笑顔をこげます。

「 まあ、ほの子つたり、おませさんね」

お母さんの笑顔も、よつこつと大きな花を咲かせる。

温かな家庭の温かな笑い声は、いつまでもいつまでも消えること
はない、と、そう信じて疑わなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0153y/>

イノセント・アライブ ~命の選択と荒ぶる息吹~

2011年10月29日17時17分発行